

SONRISA

# そんりさ

Vol.124

## ハイチ大地震特集



- |    |                       |             |
|----|-----------------------|-------------|
| 2  | ハイチ特集                 | : 翻訳ワークショップ |
| 10 | グアテマラ民衆法廷             | : 柴田修子      |
| 12 | グアテマラ支援の検討報告          | : 武田由紀子     |
| 14 | チリ サケの養殖場と海の民営化       | : 斎藤忍訳      |
| 16 | ボリビアだより その4           | : 藤田護       |
| 20 | ラ米百景『ポムボーチェの部下だったゲリラ』 | : 伊高浩昭      |
| 22 | 音楽三昧♪ ペルーな日々          | : 水口良樹      |
| 24 | メキシコ食巡り               | : ミゲル・アクーニャ |
| 25 | フォトコンテスト講評            | : 古谷桂信      |
| 26 | ニュースクリップ              |             |

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

# ハイチ地震特集

## 翻訳ワークシヨップ

さる一月二日、ハイチでマグニチュード七の大地震が起こり、死者二三人、三〇〇万人以上が被害を受け、一〇〇万人がホームレスになるといふさまじい被害が出ました。日本でも大きく報道され、国際社会から人的、物的な緊急支援が多く寄せられました。今回は、このハイチ地震関連の翻訳記事を紹介いたします。最初は、ウルグアイの作家、エドアルド・ガレアーノのエッセイです。地震後、このエッセイはスペイン語のインターネットのあちこちのサイトで引用され、多くのメーリングリストに掲載されました。ガレアーノがこれを書いた一九九六年六月からすでに一四年の年月がたっていますが、現在のハイチが抱える問題の基本をここに見ることが出来ます。

## ハイチの罪

エドアルド・ガレアーノ

訳 大西裕子

ハイチの民主主義はついこの間生まれたばかりだ。そのわずかな生涯に、このおなかをすかせた病気の幼子は、平手打ち以外の何をも受け取らなかつた。一九九一年、選挙で誕生したばかりのその年、誕生祝いのパーティも終わらぬうちに、セドラ將軍の軍事クーデターで息の根を止められてしまったのだ。だが、この民主主義は三年後に再びよみがえった。米国はたたくさんの軍事独裁政権をとつかえひつかえした後、ジャン＝ベルトラン・アリスティド大統領を再びハイチに戻した。アリスティドはハイチの歴史上初めての民主的選挙によって選ばれた大統領だったが、ハイチを少しでも公平な国にしようという大それた考えを持っていたばかりに、その座を奪われていたのだ。

## 投票権と拒否権

セドラ將軍の残虐な独裁に米国が加担した形跡を消すために、海兵隊は一六万ページに及ぶ秘密文書を米国に持ち帰ってしまった。アリスティド大統領は手かせ足かせで戻ってきた。米

国は彼が再統治することを許したが、国を支配する真の権力は与えなかつたのだから。その後継者、ルネ・プレヴァルは有権者票の九〇%近くの票を集めて大統領になったが、プレヴァルよりも力を握っていたのは、IMFや世界銀行にいる威張り散らした下っぱの面々だった。ハイチ国民が彼らを選んだわけでもなく、彼らに一票すら投じていないと言うのに。

票の力より強いのは拒否権だ。改革に対する拒否だ。プレヴァルやその他の大臣達が飢えた国民に食べ物を与えるためや、識字教育をするため、また農民に土地を与えるために貸付を求めても、それに応じようとしなればかりか反対

に彼らに命じるのだ。

「いいかげんに覚えなさい。ハイチ政府は、世界で最も見離された国民の、その中でも最も貧しい者たちのために、ほんの少しだけ残されたわずかな公共サービスも廃止しなければならぬ」と言う事を、少しも理解しない。だから教授達がさじを投じているのだ」と。

## 人口という口実

一九九五年の暮れに、ドイツから四人の議員がハイチを訪れた。到着してすぐ、彼らは人々の貧窮を目の当たりにしてシヨックを受けた。そこで、ドイツ大使は彼らにポルトプランスでは何が問題なのかを説明した。

「この国は人口が多すぎるのだ。ハイチの女はいつもやりたがり、男はいつもそれに応じるからだ」と言つて、彼は笑つたが、議員達は黙ってしまった。その夜、4人のうちのひとり、ウインフレッド・ウルフが統計を調べてみた。するとハイチはエルサルバドルと並んでラテンアメリカ諸国の中で一番人口が多い国だとわかつた。そして人口密度はドイツと同じほどに高かつたのだ。

そのハイチ滞在中に、ウルフ議員が衝撃を受けたのは悲惨な貧しさだけではない。民衆画家による絵画の美しさにも目を見張つた。そして、ハイチは……人口が多すぎる、という結論に達した。画家の人口が多すぎる、という結論に達した。実際に、過剰な人口を口実としたのは最近の事である。数年前までは西洋の主要国はもつとあ

からさまに話していた。

## 人種差別の伝統

米国は一九一五年にハイチを侵略して一九三四年まで統治した。そして自分たちの二つの目的を達成した時に引き上げていった。それはシテイバンクの貸付金を回収する事と、外国にプランテーション農園を売却する事を禁じた憲法の条文を廃止する事である。その当時、米国務長官ロバート・ランシングは、黒人は自分たち自身で政権を担う能力がなく、「もともと原始的な生き方を好む傾向があり、本能的に文明を受け入れられない」と弁明して、米国による長く残酷な占領を正当化した。ハイチ侵略の責任者の一人、ウイリアム・フィリップスは、その前から手厳しい考えを抱いていた。それは「ハイチ国民はフランスが残していった文明を保持する能力のない劣った民族である」というものだ。

ハイチはフランスの宝だった。奴隷の手による広大な砂糖のプランテーションに支えられた、もつとも豊かな植民地だったのだ。モンテスキューはその著書『法の精神』の中で、齒に衣を着せずにそれを述べている。「砂糖は、もし奴隷がその生産を担わなかったとしたら、ものすごく高価なものになるだろう。この奴隷たちはつま先から頭のとっぺんまで黒人そのものであり、鼻もあまりにべちゃんこすぎて、同情することなどできないほどだ。賢い神がああ真つ黒い肉体に魂を、それも清らかな魂をお与

えになったのは信じがたい事だ」と。

一方、神は監督する者の手には鞭を与えていた。奴隷たちはなりたくて奴隷になったわけではない。黒人は生まれつき奴隷であつて、生まれつき怠け者なのだ。そしてこの生まれつきというものは社会的秩序と両輪で、神の創造物である。つまり奴隷は主人に仕えなければならぬのであり、主人は神から与えられた義務を果たそうという意思をこれっぽちも見せない奴隷を、鞭打たなければならぬのだ。モンテスキューと同時代の学者、カール・フォン・リッネは黒人の特徴を科学的な観点から明確に描写していた。「怠惰な浮浪者であり、だらしなく、無気力で、いつも気ままである」と。やはり同時代のデイヴィッド・ヒュームは、さらに寛大なことに、黒人は「オウムが人間の言葉を覚えるのと同じように、ある程度人間の能力を習得する事ができる」ことを、証明した。

## 許しがたい屈辱

一八〇三年ハイチの黒人は侵攻してきたナポレオン軍をこてんぱんにやっつけて追い払ったが、ヨーロッパは白人に向けられたこの侮辱を絶対に許さなかつた。かくしてハイチはラテンアメリカで最初に自由を手にした国になった。米国はそれ以前に独立を達成していたが、綿とタバコのプランテーションで働く五〇万人の奴隷を抱えていた。奴隷の所有者でもあつたジェファアソン大統領は、人間はみな平等であると言つたが、またこうも言つた。黒人はこれまで

も、そしてこれからも下等な人種だと。

自由の旗は廢墟の上に立てられた。ハイチの土壌は砂糖の単一栽培によつて荒廃し、フランスとの戦争による惨禍で壊滅してしまつていた。人口の三分の一は戦闘で亡くなつていたからだ。そして、封鎖が始まつた。生まれたばかりのこの国は孤独の中に沈んだ。誰もこの国から買わなかつたし、誰もこの国に売らなかつた、誰もこの国の存在を認めなかつた。

## 尊嚴の侵害

あれほど勇敢であつたとされるシモン・ボリバルでさえも、黒人国家を国際社会の一員として承認する勇気を持ち合わせていなかった。ボリバルがスペインに打ち負かされた時は、ハイチの支援によつて、ラテンアメリカ統一のための戦いを再び始めることができたというのに。ハイチ政府はボリバルが奴隷を解放するという唯一の条件で、七隻の船と多くの武器と兵士を提供したが、その条件の内容は「解放者」ボリバルには思ひつきもしないことだつた。ボリバルはこの約束を果たした。しかし、ついにگران・コロンビアの大統領となり、勝利を手にした時、ボリバルは自分を助けた国に背を向けた。そして、ラテンアメリカ諸国を召集して開催したパナマ会議には、イギリスを招待しておきながら、ハイチを招かなかつた。

米国は独立戦争終結の六〇年後にやっとハイチを国家として承認したが、その頃、フランスでは解剖学者エティエンヌ・セレスが、黒人は

へとペニスの間隔が短いので原始的な人種であると発表していた。その時まで、すでにハイチは残虐な軍事独裁者の手に渡っており、彼らはずめの涙ほどの乏しい財源をフランスへの借金の返済に充てていた。つまり、ヨーロッパは、尊厳を侵害したその代償として、ハイチに対して、フランスへの莫大な賠償金の支払いを命じていたのだ。

ハイチに対する迫害の歴史は、現代では悲劇の様相を呈しているが、それはまた西洋文明における人種差別の歴史でもある。

1996・7・26 モンテビデオ

<http://www.patriagrande.net/uruguay/eduardo.galeano/escritos/los.pecados.de.haiti.htm> (ウルグアイの雑誌 Brecha 556, Montevideo, 26 de julio de 1996 からの転載) よし

ハイチが独立するために、フランスに対して総額一億五千万フランの「賠償金」を支払わなければならなかった。そのために、ハイチ政府はフランス民間銀行から二四〇〇万フランを借りて支払いにあてるが、この借入金の元利返済は、米軍占領まで一〇〇年近くに及び、国家予算の八〇%を返済に充てなければならなかったほどだった。負債の額は現在の二一〇億ドルに相当すると言われている。米国による占領が行われ、さらにその後一九五七年から八六年までデュバリエ父子による長い独裁政権が続く。一九九一年にジャン＝ベルトラン・アリスティドが選挙で選ばれ大統領に就任する、

が、ガレアーノのエッセイにあるように、米軍支援の軍事クーデターで失脚、亡命し、その後一九九四年に復帰するも米国の圧力下におかれる。一九九六年に選挙でルネ・ガルシア・プレバルが大統領に就任し、その後の二〇〇一年に、アリスティドは得票率九〇%という圧倒的な支持率で再び大統領に選ばれる。二〇〇四年、米国とフランスがバックにいたクーデターでアリスティド大統領が追放され、同年、国連決議一五四二に基づく国連ハイチ安定化ミッション MINUSTAH が発足し、ブラジルが指揮する国連軍がハイチを軍事的にコントロールすることになる。国連軍による占領下で、二〇〇四年から二〇〇六年までの間に、占領に反対する人々が一万四千人から二万人の人々が殺害されたと推定され、またアリスティドの支持者、コミュニティ・オーガナイザーなども多数投獄された。国連軍兵士によるレイプやその他の人権侵害も報告されている。

一方、経済的には、IMFによる厳しい新自由主義政策で、徹底した民営化が行われ、民族企業が潰された。ハイチはセメントの主材料となる石灰が豊富で、国立のセメント工場があったが、これも民営化で閉鎖された。補助金を受けた安い米産のコメ(マイアミ・ライス)が入って、ハイチの農業は破壊され、農村人口が都市部に流入することになった。その結果、ハイチは小麦やコメのほとんどを輸入に頼るようになる。さらに、大きなハリケーンによる被害も度々あった。

今年一月に地震が起こった時、ハイチは、人口の七五%が一日二ドル以下で生活し、五六%が一ドル以下で生活している、という状態だった。この地震でこれほどの被害が出たのは、経済的社会的な要因も大きく影響しており、人災の部分も大きいという指摘もある。

次に紹介するのは、「侵略のための無秩序戦略」とBBCの記事二つです。いずれも地震の少し後に書かれたもので、米国が地震直後に真っ先に軍隊を派遣し、災害の緊急支援よりハイチを軍事的にコントロールすることを重視しているのではないかという趣旨のものです。地震より2か月以上が経過してハイチの状況も変わっている現在、内容が少し古く感じられるのは否めないことをお断りしておきます。また、記事の内容はかなり断定的、挑発的な部分もありますが、ハイチの現代史は米国の干渉なしでは語ることができないこと、そして日本のマスメディアでは取り上げられていないことなどから、掲載する意味があると考えました。もう少し新しい情報も載せたかったのですが、翻訳に時間がかかることなどで今回は無理でしたので、ハイチ地震後の米国の対応について、以下のように少し補足します。

地震が起こってから、米国はまず軍を送り、まず空港をコントロールしたことは記事にも触れられているが、沿岸警備隊を送って海岸線警備を行い、ハイチ人がボートで米国に逃げ出さ

ないように監視することも米国が最初に行ったことの一つだった。そして、ヘリコプターで一日に数回「米国に向かおうとしないように」という放送を流している。「レッドゾーン」という危険地域を指定してそこに救援団が入ることを禁止した。米国のデモクラシー・ナウの報道によると、ポルトープランスにある総合病院では、地震直後からけが人の治療を行っていたが、医薬品が底をつき、麻酔なしで手術をしている状態だった。米軍が来たのは一週間たってからで、しかも建物外部のコントロールを行うのみで医療品の供給はなかった。また、ハイチで治療できない重症患者を米国の病院に運ぶこともなかった。

米国と国連、NGOの間に連携はなく、援助活動がばらばらに行われたこと、よく組織されたコミュニティ・グループがあるにもかかわらず、これらのとの連絡がなかったことも指摘されている。コミュニティを通していたら、支援物資の分配ははるかに迅速に効率よくできていただろう、という指摘もある。

ハイチの状況にコミットしてきた米国のNGOトランスアフリカ・フォーラムは地震より二カ月が経過した三月一日、「ハイチの医療状況は改善している、医療の供給は需要を満たしている」という米軍サザン・コマンドのスポークスマン談話を掲載したニューヨークタイムス紙の報道に反論し、「ポルトープランスやその周辺では依然として多くの人々が窮乏生活を続けており、ケアを必要としているのに医療にア

クセスできない人も非常に多い」というコメントを出している。

## メディア報道

たとえば、地震で刑務所も破壊され、囚人が逃げたというニュースは、日本のメディアでも報道されたが、いずれもそのために治安がさらに悪くなる、という扱いだっただが、囚人の多くは二〇〇四年のクーデターの時のアリステッド支持者やコミュニティ・オーガナイザーで、囚人の八〇％は裁判も行われなまま現在に至るまで収監されていた、という事実は報道されていない。

## 復興に向けて

2月にはG7会議(カナダ)が開かれて、G7とハイチの二国間借款は取り消し、国際金融機関による多国間借款については今後検討するという事になった。だが、地震後の国よりも早く債務取り消しを表明したベネズエラがこの会議に招かれなかったなど、国際社会によるハイチ復興支援を調整することより、政治的利益関係が優先されている部分も見られる。復興には一兆円が必要だとの試算もあるが、米国の企業など、巨利を得る機会である「復興ビジネス」を虎視眈々と狙う動きもある。ここでも肝心のハイチの人々が置き去りにされるかもしれない。

## なぜハイチは米国にとって重要なのか

ハイチには、豊富な海底油田やイリジウム、ウラン、金、銅などの鉱物資源があることが確認されている。また、原油の貯蔵や製油プラントーションを作るのに格好の深水港があり、安価な労働力がある。また、ハイチは米国などの産業廃棄物を捨てる場所にもなっている。さらに、ハイチは米国が敵視しているキューバとベネズエラの間位置しているという地政学的な重要性もある。西半球の最貧国ハイチに、世界で五番目に大きな米国外使館があるという事実だけ見ても、米国にとつてのハイチの重要性がわかるだろう。ハイチをコントロールすることと米国の利益は密接につながっているのだ。

## 日本語の参考資料

ハイチ年表(06年まで詳細に掲載) <http://www10.plala.or.jp/shosuzuki/chronology/carib/haiti1.htm>  
Democracy Now! 日本語ページ  
<http://democracynow.jp/submov/20070723-1>

## スペイン語・英語の参考資料

<http://www.telesurtv.net/noticias/secciones/buscar.php>  
<http://www.democracynow.org/>  
<http://www.transafricaforum.org/>  
<http://www.margueriteiaurent.com/>  
<http://globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=17149>  
<http://www.ips.org/institutional/>  
<http://www.efe.com/>  
<http://www.bbc.co.uk/mundo/>  
<http://therealnews.com>

# 侵略のための無秩序戦略

ホセ・ルイス・ビバス

訳 藤井 満

一月一二日にポルトープランスを襲った地震は、ハイチへの幾度目かの軍事的侵出と占領を正当化する格好の口実を提供した。ハイチは二〇〇四年からすでに占領されていたが、今や、いかなる仲介もなしに主要勢力によって直接占領されることになった。占領の政治的戦略的動機には事欠かない。同時に、現在の占領の主要な仲介勢力であるブラジルを牽制することにも役立つだろう。というのはブラジルは、ハイチで良い活動をしているが、ホンジュラスのクーデターの時には動いていないからだ。

現時点までに我々が目にした諸事実は、新たな軍事占領を米国が準備しているのではないかという懸念を裏付けているようだ。現在の占領者である国連ハイチ安定化派遣団、とりわけ軍事的指揮権をもつブラジルとの摩擦、人道支援の麻痺と無秩序状態の助長、無秩序と暴力のイメージをつくりあげ占領を正当化する世論をもたらすメディアキャンペーン……といったさまざまな要素が、そのことを示している。

ハイチの人権状況の悪化を意図的に容認していると疑う根拠は存在する。たとえば、メディアで広く報じられた救出活動における調整の欠如である。本来、調整の役割は国連が担うべきだが、米国によってその役割を担う権限を奪われているようにみえる。米国は当初から、救援

活動を調整する際の重要拠点のひとつである空港をおさえている。国連がリーダーシップをとれず、ハイチが「破綻国家」である現状では、有効な救援活動を指揮する者はいないのだ。

また、米国の軍派遣の素早さと比べると、援助の遅さは際だっている。○五年のハリケーン・カトリーナ後の救出活動に参加した、米陸軍の退役中将ラッセル・ホーナーは、今回の地震後のハイチの状況について「カトリーナを通して我々はすでに教訓を得ている。水と食糧を運び、人々を避難させ……。もっと素早く行動するべきだったと思う」と語った。たとえば、米陸軍がすばやく派遣されたのに比べ、海軍の病院船の準備は悠長に見えた。「鈍足で老朽化した船で、準備が完了してから到着までに一週間はかかるだろう」とペンタゴンのスポークスマンは語った。迅速に援助する他の方法もあつたはずだ。たとえば、国防総省の元補佐官ローレンス・コーブの「隣国キューバには世界でもトップクラスの医者が多い……彼らを我々の飛行機で運ぶよう試みるべきだ」という提案を採用することもできた。

これらの事実は、米国政府にとって人命救助の優先度が低いのではないかという印象を我々に与える。米國務省のスポークスマン、フィリップ・クロウリーは「我々は、国を安定させ、人命救助のための物資や人材を供給することを援助しているのであり、ハイチを再建するため長期間滞在することになるだろう」と言い、ヒラリー・クリントン國務長官は、北米の軍隊はハ

イチに「きょう、あす、近い将来」に滞在しつづけるだろうと発言している。

ハイチの国連軍指揮下にある他の諸国、とくにブラジルとの外交摩擦が表面化し、米国のハイチにおける「使命」は、純粹な人道支援とかけ離れていることを示した。国連事務総長バン・キムンは一月一四日、「すべての勢力が国連ハイチ安定化派遣団の指揮のもとで協力することが望ましい」と述べたが、米国はこの提案を受け入れなかった。米政府関係者は、米軍は国連の指揮と「調整」はするがそれ以上ではないと語り、クロウリーは「米政府の命令のもとで活動し、ハイチ政府とハイチ人民の名において、国連のミッションを援助することと表明している。

この「調整」がどのようなものかは、ブラジルのネルソン・ジョビン国防大臣の反発を見ればわかるだろう。彼によれば、他の諸国との相談もなしに米国はポルトープランス空港を支配下に置き、貨物や人員を輸送するブラジル空軍機の着陸を妨げかねないという。ブラジルの新聞フォーリャ・デ・サンパウロ紙は「ブラジル空軍機の着陸を妨げているのに加え、MINUSTAH（ブラジル人が主導する国連安定化派遣団）の空港への着陸も妨害していると、ブラジル側は批判している」と報じた。

後に発表された、「米軍は人道的な役割を第一にしており、治安には干渉しない」というヒラリー・クリントンのジョビンに対する声明にもかかわらず、そうした「人道的」活動は、「市民組織ではなくペンタゴンに指揮され」、アメ

リカ南方軍を通して「軍事作戦を展開し、米国の戦略目的を達成するための治安維持の共同行動を進めること」が役割である——と、グローバルリサーチ紙のミシェル・チョストフスキーは指摘している。

もうひとつ重要な要素は、ハイチの「無秩序状態」が道具として利用されているのではないかと、ということだ。その目的は、無秩序と暴力というイメージをつくりだし、侵略を正当化することである。少なくとも米国政府に近いメディアは、状況を劇的に見せようとしてきた。たとえばポルトープランスではだれも銃声を聞いていないのに銃撃戦の機銃掃射があったと報じ、新たな犯罪グループ結成という話も広めた。このようにして地震の二日後には、「混沌のハイチを犯罪組織が支配か」と題する記事を読むことができた。以下がその記事である。「地震で破壊されたポルトープランスを夜の帳が包むころ、住民たちは、銃声を聞いたと語った。これは驚くべきことではない。ハイチでは、自然災害だろうと政治だろうと緊急事態下では、夜間は武装グループが路上を支配し、犬の遠吠えと同様、銃声は珍しくもなんともない」

カナダハイチ活動ネットワークのコーディネーター、ロジャー・アニスは「CNNなどのニュース番組に充満する略奪と暴力というイメージは米国防総省のロバート・ゲイツ国防長官によって再生産されている」と指摘する。支援物資を空から投下しない理由についてメディアに尋ねられたゲイツは、「空からの投下は混

乱をもたらすだけだと思う」と発言した。物資の投下による混乱は、物資が被災者に届かないことよりも悪いとゲイツは見ているのである。

不気味なのは、「無秩序と暴力」をもたらさうとする周到な悪意によって、被災者支援が届いていないのではないかとということだ。ロジャー・アニスによると、「三日前の地震の後で、ハイチ民衆に対する大規模なサボタージュとしか思えない事例が増えつつある。重要な薬品や食糧、水を浄化する化学薬品、車両などの備蓄がポルトープランス空港に山積みになされ、メディアが国際的な緊急援助の努力を伝えるにつれて、破壊された都市の住民は、いつになつたら何らかの援助を目にすることができるとかと自問しつづけている」という。

BBCレポーター、アンディ・ガラガーは、一月一五日の金曜日に首都のあらゆる場所を歩き、「行く先々で住民に案内され、彼らの家や生活がどうなったのかを見せてもらった。そして、『どこに援助があるの?』と何度も質問された」。空港の状況については「大量の物資が山積みになされ、多くの人間もそこにいる。分配にどんな問題があるのか私にはわからない」と報告する。同様に、ある現地住民の観察によると、「メディアのスタッフは、ヒステリックに行動する絶望的なハイチ人の物語をさがしている。実際には大半の人々が落ち着いて行動しているのに、実際の状況は目に入らないようだ」

米国は、三〇人のキューバ人医師が一年前からハイチにいる約三〇〇人の医師と合流するた

めに到着した直後に空港を占拠した。空港占拠の背景についてトリニダ・トバゴ・エクスプレス紙は「各国元首を含むカリブ共同体の緊急援助ミッションは金曜日、米国の管理下にある空港への着陸を許可されなかった……キューバとベネズエラからの飛行機を着陸させられなかった。それで、カリブ共同体のミッションの着陸も許さなかったのではないかと質問されたジャマイカのゴールディング首相は、『すさまじい悲劇を前にして、そのような幼稚な思考が本当でないことを願いたい』と答えた」と書いている。

ジャクメル映画協会のデイビッド・ベルも、メディアによる無秩序と暴力のイメージに反論する。「……私はただの一度も襲撃や暴力を見ていない。逆に、隣近所同士、友人同士、他人同士が助け合い、生存者をさがすため素手で力を振り起こす姿を見てきた。伝統医療で人が人を治療する人や、集団埋葬の厳粛な儀式も見てきた。二〇〇万人が援助物資や薬品、食糧、水を待ちつづけるスタズタにされた都市。大半の人はいまだに援助を手にしていない。だがハイチは、生き残った人々を誇るべきだ。悲劇的な状況下で示された彼らの尊厳と品位はそれ自身、驚嘆するべきものである」

ここまで紹介したすべての要素が、侵略と占領を正当化するための「無秩序戦略」が存在するのではないかとという疑念を裏書きしているのである。

开展 ALAI, America Latina en Movimiento

<http://www.alainet.org/active/35579> (2010-01-18)

# ハイチを支配するのはだれ？

ヘルルド・リサルデイ、パリ  
訳 山本昭代

ハイチでは震災から約一週間経ち、被災者救援の努力が続けられる中で、この国でだれが指揮権を握るのかを巡って、国際的な論議が起きつつある。

アメリカ合衆国がハイチを一時的に「占領」している状況について、ベネズエラとニカラグアがすでに危惧を表明していたが、一月一八日、フランスも同様の見解を示し、国連に対してハイチにおけるアメリカの果たす役割について明確にするようにと求めた。

フランスのアラン・ジョワイヤンデ協力担当相は、ポルトープランスを視察した後、「ヨーロッパ」テレビのインタビュウで「ハイチを救援しようという話で、占領することではないはずだ」と述べた。

これに対してアメリカ政府は、ハイチのルネ・プレバル大統領と共同声明を発表し、「ハイチ大統領は同国における米国政府と米国民の努力を不可欠のものとして感謝している」と述べた。E F E通信によれば同声明ではさらに、両国の「主権を互いに尊重すること」を強調していた。震災後数日のうちに、アメリカ合衆国はハイチの政治的空白を前にリーダーシップを取ることを決意し、緊急支援として一億ドルの拠出を約束し、一万人の兵士を派遣した。

しかし一八日、ヨーロッパは緊急支援約一億七五〇〇万ドルと短期復興支援約一億五四〇〇万ドルを拠出すると発表し、ハイチへの財政援助でアメリカの拠出額を抜いた。

## 「資金援助」

またジョワイヤンデ大臣は、ヨーロッパはハイチにおいて、フランスのほかイタリア、ポルトガル、ルーマニアが参加する警備隊を配備する必要があると述べた。議長国であるスペインの代表者によれば、この警備隊は一五〇人程度の規模になる予定だが、一月二五日に行われるハイチ状況を分析する国連の安全保障理事会の会合での決定によるとしている。

ヨーロッパ連合は、ハイチに対する短期の緊急財政援助に加えて、長期的な復興作業のために約二億九〇〇万ドルの支払いを約束した。一月一八日、フランスはさらに、ハイチの「再建と発展」のための国際会議を準備するため、同二五日にカナダのモントリオールで会合が行われる予定であると述べた。

ブラジルはハイチにおける国連の治安維持軍の中心的な存在だったが、同国のルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルバ大統領もまた、ハイチへ支援物資を搬送・分配するためにもっと連携する必要があると訴えた。ルーラ大統領は、ハイチにおいてブラジルは重要な任務を果たしており、すでに一五〇〇万ドルを支援していると述べ、富裕国はもっと経済的な援助をしてほしいと求めた。「ハイチ再建のため、世界中が

資金を拠出してもらいたい。ハイチは中南米でもっとも早く独立を勝ち取った国である」とルーラ大統領は述べた。

## 「世界の孤児」

震災後のハイチにおける諸外国の影響力をめぐる論争の背景には、今日カリブの貧困国となつてきているこの国の、欧米によって支配された過去の歴史がある。今日ハイチ領となつているエスパニョーラ島の西半分は、当初スペイン領だったが、一八〇四年に独立するまでフランス領となつていた。一九一四年から三四年までは米国に占領されていた。ハイチは「一八世紀の終わりごろ、当時、砂糖生産により世界でもっとも豊かな植民地で、その富の四分の一はフランスにもたらされていた」と雑誌「エコノミスト」の最新号は述べている。その富の大部分は、ハイチに連れてこられた七〇万人のアフリカ人奴隷の労働によって生み出されたものだった。彼らは今日のハイチ国民の基盤となつている。「一八世紀、カリブ地域は富の源泉となるだろうという幻想があった」とフランスの歴史家ジャン・ルネ・アーム氏は本紙に語った。しかしハイチが（元奴隷の黒人国として）独立するや、この国は誰からも見捨てられた」という。同氏によれば、アメリカがハイチに露骨に影響を示していることに対してフランス政府が表明している不満は、「超大国（アメリカ）に対するフランスの劣等感」によるものだという。

# 増える軍人、減る市民

BBCムンド編集部  
訳 松枝 愛

一月一八日、ハイチの首都ポルトープランスでは、国を出る格好の機会となる米国査証の取得を求めて約五〇〇〇人のハイチ人が米国大使館に詰めかけた。他方、米国政府指導のもと二〇〇〇人以上の米国海兵隊員が、このカリブ海の小国に結集する準備を進めていた。

しかし、首都の大部分を破壊した震度七の大地震後に現地へ向かう武装兵は、彼らだけではないようだ。国連の潘基文事務総長は、九〇〇〇人を越える既存の国連治安維持部隊に加え、さらに一五〇〇〇人の警官と二〇〇〇〇人の兵士の増派を国連安全保障理事会に提案した。国連付のBBC特派員バーバラ・プレによると、国連内では予定を早めて翌日にはこの事務総長案が採択されることになった。

さらなる治安維持軍の到着は、大惨事から一週間と数時間後の、市民の間に絶望感が増幅した時と重なった。一八日、米軍及び国連治安維持部隊は空港入口で激昂する民衆に対処せざるを得なかったものの、ジョン・ホームズ国連人道問題事務次官は、概ね状況はコントロールされていると語った。

## 武装地帯

ポルトープランスに派遣されたBBC特派員

の一人、デビッド・ロイン記者曰く、地震発生後数時間のうちに米軍がポルトープランス空港を管理下に置き、人道活動家たちは不安に駆られていた。彼らは、基本的に援助は民間の手によって差し伸べられるべきだと考えている。

しかし同記者によると、地震発生前から活動していた援助団体が地震で破壊されたため、民間団体の活動は多くの難題に直面している。

## 何としてでも脱出したい

米国査証を請う約五〇〇〇人が、米国大使館を取り囲んだ。首都の大部分を破壊した地震から約一週間経ち、数千人の首都住民が国外や地方への脱出を試みている。BBCポルトープランス特派員マーク・ドイル記者によると、一八日、米国大使館の前には約五〇〇〇人が査証取得を求めて列を成していた。同記者は、「人々は米兵に監視されながら、照りつける太陽の下でずっと立っていた」と伝えている。彼らの多くは米国に暮らす数万人のハイチ人の家族だったが、この恩恵に預かれなかったり、国を離れる資金的余裕がなかったりする人々は、都市を離れて田舎に逃れることで充足させている。

## 脱出策としての養子縁組

そんな中、米国とオランダは、ハイチ人孤児数十人を里親と引き合わせる援助をしている。養子縁組はハイチから子どもを離す一手だが、子どもの権利侵害を危惧する団体もある。間もなく、養子にされた子らがオランダに到着する。

政府関係者はさらに一〇〇〇人ほど連れ出すために特別機を手配したと明言した。

ヒラリー・クリントン米国国務長官はCNNに対し、「養子となりうる子を特定し、新しい家族を見つけるために尽力する。子どもたちが新たな家庭に送られるよう迅速な手続きを目指す」ことに個人的に関わっていると述べた。

しかしことは簡単ではない。予定される養子縁組の中には、身元確認の書類が紛失しているのではないかとの懸念もある。地震で被災した孤児院もあるからだ。フランス及びカナダもハイチの養子縁組を受け入れた国々に含まれる。しかし子どもの権利保護を主張する団体は、緊急事態のさなかに養子縁組を進めることに反対し、注意をうながしている。そして、子どもの権利侵害を危ぶんでいる。国連機関ユニセフはハイチには約三八万人の孤児が存在し、大地震による惨禍によって、孤児の数はさらに増えたと見ている。

米国のマイアミ大司教区は先週、両親を失った子どもたちを米国まで連れてくる計画を提案した。これは一九六〇年代にキューバから米国へ一万四〇〇〇人以上の未成年が送られたピーパーン計画に倣って打ち出された作戦である。(2010年1月18日)

BBCムンド <http://www.bbc>

[co.uk/mundo/america\\_latina/2010/01/](http://co.uk/mundo/america_latina/2010/01/)

[100118\\_1913\\_haiti\\_exodo\\_gm.shtml](http://100118_1913_haiti_exodo_gm.shtml)

# グアテマラ民衆法廷傍聴記

柴田 修子

三月四、五日、グアテマラシティで戦時性暴力を裁く民衆裁判が開かれた。証人として集まったのは一〇名の女性たち。それぞれの村の衣装に身をつつみ傍聴席後部に座っている。耳にはイヤホン。カクチケル語、チュフ語、イシル語、ケクチ語、英語の同時通訳が用意されている。一般傍聴者もつめかけ、座席が満席で立つ人も多く、厳粛ななかにも新しいことが始まる興奮が会場を包んでいた。

内戦の犠牲者をしので一分間の黙祷を捧げる。続いて民衆判事および検事が紹介され、一人ずつ壇上に登場。民衆判事席には、グアテマラで初めて治安部隊による拘留女性への強姦の罪で有罪判決勝ち取ったアナ・メンデスさんのほか、フジモリ政権下のペルーで被害を受けたグラディス・カナレスさん、ウガンダにおける戦時性暴力の問題に取り組むティディ・アティムさん、東京国際女性軍事法廷に参加した新川志保子さんが座った。検事はマリ・ア・エウヘニア・ソリスとフアナ・バルマセダだ。全員揃ったところで法廷の趣旨説明があり、証言が始まる。計画段階では、参加女性全員が証言することを目指したが、時間的制約や参加者のためらいもあって、各グループの代表が証言することになった。グループに参加するほぼ全員の女性の証言はあらかじめビデオで用意されていたが、公表するのはいやだという意見もあったため一部が介にとどまった。

語訳していった。証言台に立ったのは八名。どの証言も身を裂くような痛みをこらえて語っており、会場はしんと静まり返っていた。時折すすり泣く声が聞こえる。証言は個人の体験をなぞっているが、それは一人だけのものではなく、いくつもの声の結晶なのだと思感させられた。以下に証言者の一人の話を紹介したい。

——内戦の前は幸せに暮らしていました。貧しい生活だったけど自由があり、家族がいて、好きなことをすることができました。でも戦争が始まり軍隊がやってきてから、生活は大きく変わり、村で平和に暮らすことができなくなってしまいました。みんなおびえていました。男たちは山に逃げなければならなくなりました。夜家にいて、軍隊が来たら殺されてしまうからです。家でも山でも、どこにいても殺されるのです。

私は性暴力を受けた女性です。ある日薪を探しに行ったとき軍隊に出くわし、二〇〇人の軍に捕まったのです。次々に私を乱暴しました。連れていた赤ん坊とは引き離されて乱暴され、もし誰かに話したら殺すと脅かされました。村では拷問が行われ、一〇人の男性が殺されました。軍は妊娠中の女性を強姦し、お腹から子どもを出して殺しました。これらの痛みはこの体が覚えています。夫は誘拐され、三人の子と残されました。朝六時に軍に襲われて二度と帰ってこなかったのです。

外国の人たちは、どうかこの苦しみを伝えてください。残念なことに私たち先住民は尊敬されて

いません。事実を知ってもらうため、民衆法廷を開く必要があったのです。和平合意は履行されていません。私は生き延びることができ、政府の補償金を受け取りましたが、わずかのお金をもらっても何にもなりません。夫は二度と戻らないのですから。私は性暴力を受け、夫を失うという二つの苦勞を背負いました。子どもたちは、パパはいづ帰ってくるの？ といつも聞きます。私も夫に会いたい、話をしたい。私の体験は私一人ではありません、何千人もの女性たちが同じ目にあっています。合意後の補償金は結局共同のものになってしまふ。なぜ個人に渡されないのでしょうか。私たちには仕事もなく、村から追われ、家や家畜を失いました。政府は村人を殺し、家を焼き、略奪していった——

多少わかりにくい部分もあるが、ほとぼしる感情に突き動かされるように語った様子をお伝えしたく紹介した。後で知り得た情報で補足するならば、最初に受け取ったわずかな補償金は自警団向けのものであり、合意後の共同のものになってしまふというの、執行率が低くて消化できず国庫に収められる補償金のことなのである。彼女の村はゲリラとの関係が疑われ、何度も軍に襲撃されていた。夫は連れ去られ行方不明となった。証言者のなかには、ゲリラとまったく無関係だったにもかかわらず巻き込まれた人もいた。たとえば四番目に話した女性は、生後一ヶ月の子と一緒に家にいたとき、見知らぬ女性が来てトルティージャと水を乞うたという。言われたとおり渡したところ、その後軍隊が踏み込んできて性暴力の被害にあった。五番目の女性は、両親が出かけて一人で留守番をしていたときに軍隊に暴行されている。まだ少女だった彼女はそれで妊娠・

出産し、偏見にさらされながら子どもを育てている。内戦期に性暴力が「当たり前」横行していたかを被害者たちの体験は語っている。

こうした現実を民衆裁判で社会に訴える基盤には、二つの強い意志が存在している。一つめは被害者である先住民女性の正義を求める気持ちである。長年つらい体験を胸のうちに隠してきた彼女たちは、同じ経験を共有する仲間を得たことで人生が変わったという。自分が悪いのではないかという罪悪感から解放されることで、トラウマを乗り越える一歩を踏み出した。そして今度は公の場で自らの体験を伝えようとしている。その先には加害者を罰するという懲罰的正義、賠償を求めているのは言うまでもないが、それ以上に傷みを社会のなかでとらえ直して未来につなげたいという歴史的正義を求める気持ちが強く働いているように思えた。

もう一つの強い意志は、彼女たちを支える女性である。このプロジェクトは東京国際女性法廷に参加したヨランダ・アギラルさんの発案で始まり、ECAP（内戦の被害者に心理ケアを行う NGO）と UNAMG（内戦期から女性問題に取り組む組織）の協力を得て五年前から準備されてきた。さらに一年前からコナビグア、MIM（人権問題に取り組む女性弁護士グループ）、CUERDA（フェミニスト新聞）の協力を得て実現することになった。都市で活動する彼女らが、村に暮らす女性を結びつけネットワークを作り上げた。両者の出会いは、前者の熱意によって実現した。ネットワーク作りは文字通り手探りだったという。たとえばパンソスでは次のような例がある。地元保健プロモーターをしていたマティルデは六七年前、ECAPのアンケート用紙を受け取った。内戦

および暴力状況について細かい質問が書かれた紙は、一五〇人ほどのプロモーターに配布されたのだが、一カ月後までに回答したのは二人だけだった。その後保健プロモーターの上司の推薦を得て MDY のディプロマコースを受講し、三〜四ヶ月後から性暴力に関する心理ケアの活動をはじめた。最初はみな話しながらなかったが、彼女自身も被害者であり自分の経験を語りながら個別にたどるうちにグループができていった。都市の女性たちは、なぜ被害者女性と出会いたかったのか？ 私が一番疑問に思っていたことだった。その答えは、次の証言にあった。

七番目の証言者はほかの証言者とは異なり、自分が見聞きしたさまざまな被害者の声を紹介した。妊娠中に強姦されそれが原因で流産してしまった、子ども目の前で暴行された、家を焼かれた、村の出口に警官の見張りが立ち畑に行けなくなった……、どれも胸の痛くなる話ばかりだが、衝撃的だったのはそれが内戦期のことではなく、二〇〇七年の出来事だったことだ。和平合意が締結され、暴力に反対する国際法の枠組みができていながらもかわらぬ、村の強制排除が続いている。上記の証言は、カナダ系ニッケル企業の鉱山開発のために住民を立ち退かせる際に起こった出来事である。本来時間をかけて説明と手続きがなされるはずのプロセスで、さまざまな違法行為や人権侵害が行われている。その一環として今なお性暴力が行使されていることは、これまで語られないタブーであった。内戦中の暴力は過去のことではない。制度的暴力を利用する構造は現在まで続いているのだということこそ、この法廷で訴えたいもう一つのテーマだった。

八人の証言で法廷初日は幕を閉じた。証言する女性たちは、会場からバスで一時間の郊外にある力

トリック施設に宿泊した。私たちも同宿し、四日間ともに過ごすことができた。初日の夕食はとりわけにぎやかで、みな楽しそうに談笑している。グループに参加したきっかけやハイチ地震のために寄付金を集めたことなど、いろいろな話を聞かせてくれた。それぞれのホッとした表情から、この日を迎えるまでの重圧感の重さがうかがえた。

法廷二日目は、専門家証言である。開廷の宣言と民衆判事、検事の紹介の後、ビデオ証言の一部が紹介された。そして軍事戦略、ジェンダー、心理学、医学などの九人の専門家が証言した。個々の事実認定を行う一般的な裁判と異なり、専門家は証言はグアテマラの内戦というコンテクストに性暴力を位置づけることに焦点が置かれた。内戦中の命令系統が大統領参謀本部を中心として動いていたことや、発掘された秘密墓場から子どもの遺体も見つかっており殺戮が無差別であったこと、それが先住民差別の一環だったこと、性暴力の九九%が女性に対するもので、それが共同体からの排除という形で女性に与える影響ははかりしれないことなどが明らかにされた。

休憩の後、いよいよ判決である。判決では、内戦期にグアテマラ刑法および国際法に鑑みて重篤な違反行為がなされた事実を認定し、その責任の多くが「軍または行政による指令系統を通じた軍隊・国家警察・政府機関における最上層部に帰される」にもかかわらず、今日にいたるまで免責の状態が保障されていることを断罪した。そして一五項目の勧告を提示し、国家に対し免責の解除、補償の実行、再発防止の必要性を強調した。判決には三五名の立会人が署名し、会場は満場一致で拍手が鳴り止まなかった。

この裁判の目的は、内戦中に戦闘手段の一つとして性暴力が行使されたという事実を明らかにし、それが国際法および国内法において犯罪であると判定した上で、再発防止への政策立案に向けて国家に対して勧告することである。当事者を犯罪者として裁くよりはむしろ、性暴力の実態を明らかにし、それを人道に対する罪と認定する国際的な流れに位置づけることに焦点を定めた。そのため国際社会から招聘された人々が、民衆判事および立会人を務め、各国大使館に招待状も配られた。

傍聴にはノルウェー、ドイツ、スイス、コスタリカ、フランス、スペイン大使館の関係者が臨席した。立会人は、ロサリナ・トウユクさん、マリア・トフさんをはじめとするグアテマラの活動家に加え、コロンビア、スペイン、コスタリカ、カナダ、ノルウェー、ペルー、メキシコ、日本からの参加者が務めた。グアテマラ国家を被告として裁くという当初の予定を変更して国際社会の枠組みのなかでグアテマラの戦時性暴力をとらえなおすという戦略は、この法廷の成功の鍵を握る英断だったと思う。国内問題に矮小化するのではなく、国際的に認められた人道に対する罪であることを示し、なおかつそれがいまなお続く問題なのだという点を明らかにしたからである。民衆法廷の意義については、東京国際女性戦犯法廷の際クリスティーヌ・チンキン判事が次のように語っている。「民衆法廷は『法は市民社会の道具』である、法は政府だけのものではない、という解釈を前提としていない場合には、市民社会は乗り出すことができる。従って、国家が正義を保障する責務を遂行しない場合には、市民社会は乗り出すことができるし、そうすべきなのである」。私事で恐縮だが、私は二〇〇〇年の東京法廷の際、ボランティアを

引き受けておきながら直前に都合がつかず断ってしまった。そのときの忸怩たる思いを持ってグアテマラに足を運んだ。民衆法廷は、単なる模擬裁判ではない。正義を求める一つの手段であると、今回の裁判を傍聴して確信した。

## グアテマラ支援の今後

### 支援検討委員会 武田由紀子

前号の『そんりさ』でご報告しましたように、今年度からレコムの支援先をコナビグアから「希望をばぐむ女性たち」協会へ変更することにいたしました。本稿では、そこに至るまでの経緯および今後の見通しについてお伝えしたいと思います。

レコムは、一九九三年の発足以来グアテマラを主な支援活動のフィールドとし、なかでも当初からコナビグアの活動を応援してきました。コナビグアは内戦被害者・寡婦のマヤ先住民族の女性たちによって立ち上げられた政治組織で、内戦中の一九八八年、それまで社会の表舞台に出ることのなかった農村のマヤ女性たちが、自警団の解体とあらゆる弾圧の停止、強制徴兵の撤廃、人権侵害の責任者に対する法的責任追及、犠牲者の遺骨を取り戻すための秘密墓地の発掘、被害者に対する補償といった要求を掲げて、平和の実現と人権の回復のために活動を開始しました。レコムは彼女たちの勇気ある取り組みに感銘を受け、その目的に賛同して支援が始まりました。レコムがコナビグアを支援することにしたのは、現地と関わるなかで彼女たちの活動が非常に重要であることを確信したことで、コナビグアのような政治に関わる活動は外部からの支援をとりづらいつい

事情もありました。

コナビグアの女性たちは、内戦下の厳しい状況下で、平和と尊厳を取り戻すために果敢に行動を起し、また、各地域のコミュニティの女性たちを組織し、全国組織へと成長していきました。一九九六年の和平協定締結後はこの和平合意がきちんと履行されるようにさまざまな場に参加して積極的にロビー活動を展開、同時に女性の政治参加の促進やリーダー育成に努めてきました。現在、国内一県の四〇〇のコミュニティにまたがり、一万人以上のメンバーを持っています。

レコムのコナビグア支援は、コナビグアの理念と行動に賛同し、現地からの要請にできるだけ忠実に沿うかたちでの支援を心がけてきました。そして、その流れを継承し、コナビグアの内政には立ち入らず、支援は原則的にコナビグアからの要請に基づいて行うという形態を保持してきました。二〇〇三年に始まったチマルテナンゴ県コマラパのプロモーター支援もコナビグアからの要請によるものです。レコムの支援はプロモーター二人分の一年間の活動費にあたるもので、一〇〇万円強を毎年送ってきました。

今回の見直しの契機は、レコムの支援が具体的にどのような成果を上げているのかが見えないこと、またコナビグアが組織として今後どのように活動を展開していこうとしているのが見えない、ということでした。レコムとしてコナビグア支援の重要性と必要性を強くアピールできないこと、そしてそれがグアテマラ基金への寄付が年々減少していったことに反映され、これまで通りの額をコナビグアに送金し続けることが困難となってきたのです。

レコムのあゆみとともにあったコナビグア支援の

見直しは、いろいろな意味で大きいものであるとわれわれも受け止め、この一年間、現地視察を含め、運営委員会や支援検討委員会のメンバー間で何度も議論を重ねてきました。そして、最終的にさる一月の拡大運営委員会において、二〇〇九年度はコナビグアに対しプロモーター一人分の活動費を送る、そしてこれを最後にコナビグアへの継続的支援をいったん打ち切ることと決定しました。また新たに、二〇一〇年度は昨年九月の現地視察でも訪問したキチエ島の「希望をばぐくむ女性たち」協会を支援するということが合意にいたりました。

討議中には、コナビグアへの支援額を減額する、取りやめるにしても段階的に進めるべきではないか、あるいは「希望」協会への支援と折半にし、コナビグアへの支援金は「希望」協会との交流費にあててもらおうといった代替案も出ました。しかし、これまで見てきたコナビグアの現状を考えると、やはり支援はいったん打ち切るべきであるという結論に達しました。

組織としてのコナビグアは、明確なヒエラルキーを保持し、頂点の運営委員会が決定し、それが下へとおろされていきます。内戦下の状況では、指揮系統がはっきりしていなければ組織は物事を迅速に進めることができず、またメンバーの安全を図る意味でも必要でした。が、問題は、そうした八〇年代の組織体質を今日まで引きずってしまっているという点です。実際、運営委員会メンバーの顔ぶれも九〇年代からほとんど変わっており、地域のリーダーも固定しています。その結果、指示する側・される側という構造がずっと残ってしまい、組織として硬直化が進み、活動が停滞・マンネリ化してしまっているのは否めません。また、

これまで見てきたところ、組織全体としての中長期的なヴィジョンが明確でなく、自分たちの活動を評価して反省材料とし、対策を立て、新たな展開へとつなげていくフォロワーアップがきちんと行われていません。さらに、このようなかたちでコナビグアの活動が停滞し支援が離れていくにつれ、予算も縮小し、プロモーターの活動費を払えなくなった末端の組織が事実上切られていくという事態が生じています。そうした女性たちの一部は、「希望」協会や性暴力の「変革の主体」プロジェクトにも参加しています。

今年度から支援を行う「希望」協会は、『そんりさ』一・二二号の「グアテマラ視察報告」の中でも紹介しましたが、先住民女性で修道女であるマルーカ・シプリアノさんが始めたプロジェクトで、女性の組織化を通じて女性のエンパワーメント、マヤ文化とアイデンティティの強化、生活改善などをめざすものです。キチエ島の三四のグループで構成され、参加者のほとんどは内戦の被害者です。女性問題のワークショップやグループでの小規模生産プロジェクト、コミュニティ教育などを行っています。マルーカさんは、固定したリーダーが組織を引っ張っていくのではなく、参加する女性たち全員が力をつけていくことを基本的な理念としています。昨年九月に現地視察で彼女たちの組織を訪問した際も、女性たちがとても活発に活動し、力をつけてきている様子が見られました。

「希望」協会は、数年カリタス・ジャパンの助成金を得て、小規模生産プロジェクトを行ってきました。が、この助成は二年前に終わりました。その後一年間のみ人件費支援がありました。夏以降は代わりとなる資金援助のめどが立っており、

緊急に支援を探しているところです。「希望」協会は最近法人格を取得し、活動をさらに活性化しようとしているところです。この二・三年で基盤を整え、活動を継続するための支援をとりつけることができるような体制を固めたいと考えています。そのためには専従のスタッフが不可欠ですが、人件費の確保は非常に困難です。

レコムは今年度、「希望」協会を支援することに決定しましたが、この支援を長期的に継続してゆくかは未定です。レコムからの支援で一定の成果が上がり、レコムの支援なしで活動を進めていくことができるようになれば、その時点でまた再評価を行い、別のプロジェクトや運動を支援することになるかもしれません。いずれにせよ、この一年の経過を見ながら進めていくこととなります。

もっとも、コナビグアのプロモーター支援は停止しますが、コナビグアとの協力関係自体は今後継続していきます。これからの活動の内容によっては支援の再開もあり得ます。そしてコナビグアの女性たちの活動を今後もフォローしていきたいと考えています。同時に、短期的には「希望」協会支援をレコムのグアテマラ支援の軸としながらも、モホマヤスや性暴力プロジェクトも含め幅広くいろいろな団体の活動も見えていき、現在のグアテマラの現状をもっとひんばんに『そんりさ』紙上で紹介していきたいと考えています。

今後、レコムとしても、これまでのやり方を反省し、支援のあり方にもっと気を配り、支援先から送られる報告書の内容をよく検討し、フォロワーアップをしてゆくといったかたちでプロジェクトをとともに作っていくという姿勢を心がけたいと思います。

# 「チリの奇跡」がもたらしたもの サケの養殖場と海の民営化

ラウル・ジベチ 二〇〇九年八月一七日

「チリの奇跡」と呼ばれる急速な経済成長は三つの柱によって支えられている。銅の高価格、セルロースの生産、そしてサケの養殖産業である。しかし過剰なサケの輸出は衛生、環境、社会経済の側面において深刻な問題を引き起こしている。チリの東南部のチロエ島は自然が豊かで美しい風景を有しているが、最もサケの養殖が盛んな地域の一つである。ここは、海洋全体の一％にも満たない面積で、世界の漁獲の二五％を占めるほど、世界でも生産性の高い海域となっている。そのチロエ島とプエルト・モント地方はこの一五年間でサケの養殖業が盛んになった。北ヨーロッパと日本の企業が一五年で当初の一三倍もの額を投資するまでになった。チリは米国、日本、ヨーロッパ共同体に二五億ドル相当のサケを輸出しており、これが、銅、セルロースとともに、「チリの奇跡」と呼ばれる七〇％の経済成長を遂げることになったのだ。

## アキレスの踵

二〇〇八年三月二七日付けのニューヨーク・タイムズ紙は「サケのウイルスがチリの漁業が

いかなるものかを暴いてくれた」と報じた。この記事は注目を集め、大きなスキャンダルとなった。記事の内容は何百万匹というサケがISA（伝染性貧血）ウイルスで死に、それで引き起こされた危機のために数千人の労働者が解雇されたというものだった。チリの養殖サケの三〇％が米国に輸出されていたので、このニューヨーク・タイムズの記事は衝撃的だった。ノルウェー資本のマリン・ハーベスト社はサケ養殖で最大手の企業であるが、チリのサケの二〇％を輸出しており、ISAウイルスは、自社の養殖場で発生したこと、そして多量の抗生物質を使用していることを認めた。「海洋生物学者や環境活動家によれば、サケの排泄物が水中の酸素を減らし、他の海洋生物を殺している」とも記事は伝えている。そして、この問題に対するマリン・ハーベスト社広報担当の回答はさらに注目を集めた。それは「大きな収益を上げていたし、全てはうまくいっていた。より厳正な対応策をとる必要はなかった。」というものである。

海の汚染と大量のサケの流出（〇四年には二〇〇万匹が流出した）は他の魚やヒトへの病

気の感染を引き起こす恐れがあり、他の種の存在を脅かすことにもなる。そして、抗生物質の過剰な使用こそが最も危惧されている。

日本や米国ではチリのサケから抗生物質の残滓が何度も発見されている。抗生物質はサケがウイルス性の敗血症にかからないために投与するものだが、その一つであるキノロンは、バクテリアにそれに対する耐性が非常な勢いでできている。

## 米国で使用禁止の抗生物質を多用

寄生虫の感染、ウイルスや真菌症は、魚がストレス状態に置かれた時に起こりやすく、養殖場にはサケが詰め込まれている。それに衛生状態の管理不足がある。しかも、チリでは、米国では禁止されている抗生物質などが多量に使用されているのだ。〇五年、OECD（経済社会開発機構）はチリのサケ養殖業を強く非難する報告書を発表した。その中で年間何百万匹というサケが養殖場から流出し、〇二年に発ガン性物質が含まれているため使用が禁止された殺菌剤が未だに使用され、抗生物質が過剰に使用されていると述べている。米国のカベヨ博士（免疫学）はチリではノルウェーの七〇から三〇〇倍の抗生物質が使用されていて、チリにはサケ用の抗生物質のブラック・マーケットが存在している、と述べている。マリン・ハーベスト社のデータによると、〇七年、ノルウェーではサケートンあたり〇・〇二グラムの抗生物質がつかわれたのに対して、チリではサケートンあ

たり七三二グラムの抗生物質が使用されている。〇八年には、ノルウェー・〇七グラムに對してチリでは五六〇グラム使用されている OECDの理事は「ヨーロッパの多国籍企業はチリで自国では許されないことをやっている」と主張している。チリの南部は多国籍企業にとつて進出し得る最後の地である。ヨーロッパと比較して、水温が高く、それゆえにサケの生産性が最大なのである。

記事が出た数日後、バチエレ政府は輸出が減少することを懸念して、サケ養殖産業の擁護にまわった。にも関わらず、生産高は三〇〇五〇%減少し、五万人のうち二万人の労働者が解雇された。産業は深刻な危機に陥った。銀行は不可能なまでに債務の返済を要求し始めた。

## 世界一の低コスト

チリのサケ養殖のコストの低さは第一に、このセクターの劣悪な労働環境にあると説明しうる。サケの養殖産業は報告されているだけでも最も事故件数が多く、罰金も多く課せられている。主な問題は衛生面、安全面である。三分の二の企業が労働法違反を犯し、外注化によるインフォーマル化が進み、とにかく労働環境が危険極まりない。このセクターで働く労働者の七〇%は女性で、工場労働者においては九〇%を占めているが、彼女たちは寒さ、湿気、高密度（労働者が空間に比して多すぎる）の労働環境に置かれ、トイレに行く時間も厳しく制限される、などの状況に苦しめられている。また、

妊娠していることが分かれば解雇されることもある。

サケ養殖は、チリの中でも最も労働災害の多い業種であり、〇五年二月から〇七年七月までに四二人が海中で死亡するか行方不明になっている。〇三年から〇五年にかけて五七二件の調査が入ったが、それでもその後七〇%の企業が基準違反で罰金を科せられた。中でも潜水は最も危険な仕事だが、〇七年に七千人いたダイバーのうち、国際基準を満たす潜水トレーニングを受けていたのは一〇〇人にすぎなかった。また、この産業で働く労働者のうち組合加盟者は一三%から一五%にすぎない。

他に、網と廃棄物による環境破壊の問題もある。チロエの南に位置するアイセン地域では、〇五年にサケ捕獲の網を作っている工場のすべてが環境を破壊しているために罰金を科せられた。またロス・ラゴス地域では産業排水の処理が悪いために五〇%の工場が罰金を科せられている。〇六年には、同地域の工場のどれもが廃水処理基準を満たしておらず、四九の工場のうち三〇が操業停止となった。狭い面積に養殖場が集中していることが汚染を引き起こしている。三〇〇キロの海岸線に沿って六〇〇もの養殖場があり、そこには一億二千万匹のサケが飼われているのだ。ノルウェーでは、これだけのサケは千キロにわたって飼われている。サケは直径三〇メートル、深さ六〇メートルの檻の中で飼われている。このような集中的な養殖をおこなったので、チリのサケ輸出は一九九一年の

一億九千万ドルから二〇〇八年には二四億ドルに増えた。チリのサケはほかのどこよりも安い。国際価格が一キロあたり七・九ドルなのに比べて、チリは二・九ドルだ。

## 海の民営化

ラテンアメリカの環境紛争監視団体のルシオ・クエンカは「法律はサケの養殖企業に水利権を委譲した時点で海を民営化してしまった。公共財産は金融資本に変わりつつある。」と主張している。議会は、BNAウィルスが発生したその三カ月後に、サケの養殖産業は要求の高い国際基準を満たしている、とする委員会報告を可決している。議会で起きていることは憲法違反、無処罰、公共財産の収奪である、とする意見もあるが、チリはすでに24カ国と自由貿易協定を締結しており、サケ養殖がこれからも拡大していくことは疑いないだろう。大企業がどんどんチリの南部に進出しているが、その結果どうなるかは、チロエ島に見ることができだろう。15年前、チロエは小農や漁師などの島であったが、いまは「多国籍企業に依存する労働者」の地域に変わり果てってしまったのである。

(訳 齋藤忍)

Programa de las Americas G HP

Consecuencias del "milagro chileno": Las

salmoneras y la privatización del mar

Raúl Zibechi | 17 de agosto de 2009 赤抄訳

<http://www.jircamericas.org/esp/6361>

# ボリビア使り (その4)

藤田護 (ボリビア外務省外交アカデミー客員研究員)

## 7. ボリビアでアイマラ語とケチュア語を学ぶ―栗原重太さんインタビュ―

栗原さんにお会いしたのは、今回の滞在の始まりの頃、日本とボリビア(とペルー)の間でのフェアトレードに取り組んでいる落合友梨さんのお宅で何人かで晩御飯を食べたときでした。僕はアイマラ語で作成されるラジオドラマの調査で、Radio San Gabrielというアイマラ語のラジオ放送局の中の映像部門とアイマラ文化部門に出入りし始めていたのですが、奇しくも同じ放送局に以前から通っている方がいらっしやるといふ驚きから始まりました。

僕自身よりも長い時間アイマラ語とケチュア語を勉強して練習していらっしやる栗原さんのお話には、まだこれらのアンデス先住民言語に関する駆け出しの身として僕自身が学ぶことは多く、またこれから勉強してみたいという人が少しでもいるならば、様々な形で役に立つことと思います。なので、今回改めて、これまでの栗原さんの軌跡をインタビュウの形で語っていただくことにしました。末尾には、栗原さんの連絡先を掲載することとします。

インタビュウは、二〇一〇年一月二三日、サ

ンフランシスコ広場の脇の市場の食堂で朝食を取りながら実施しました。そして、二月一七日と三月三日に、書き起こしの修正と補足的なインタビュウを実施しました。

表記上の点として、話し言葉特有の間に挟まれる文中文末の表現をほんの若干除いてありますが、通常の書き言葉と同様なまでに編集を加えるよりは話しの口調ができるだけ残るようにしました。また、注は全て私が付けたものであり、□内は私が補足したものです。

### (1) アンデス語学に

#### 興味を持つきっかけ

藤田 どういう風にアイマラ語やケチュア語に興味をもつようになったかとか、どういう風に勉強してきたかとか、どの辺が勉強していて面白いとかか、その辺りの話をうかがえればと思います。

栗原 私は一九九一年にチリに行っただけです。ね。そこで二年ほど働いて、で一九九三年にサンタクルスに移ってきて、そこで測量の仕事をずっとしていたんです。それである程度ボリビアに慣れてきた頃、ふとスペイン語以外の他の言葉をしゃべっている人がたくさんいるっていうことに気が付いたんです。で「それ何しゃべっ

てるんだい」と聞いてみると、ケチュア語だったんですよ。サンタクルスでは、たくさんコチャバンバとかポトシとか移民の方が来てますからね。それで「あ、面白そうだな」と思っただけで、勉強というか、教えてもらったんです。まず挨拶から。挨拶とか、あと市場で買い物をするとかね、食べ物注文するとか、そういうところからね。そうして話してみると、とても面白いんですよ。相手の人も面白がってどんどん話してくれるし。それですっかり楽しくなって、ケチュア語をしゃべり出したんです。

ただ、サンタクルスでは、時々アイマラ語でね、しゃべる人もいましたけども、ほとんどケチュア語ですね。アイマラ語でしゃべる人はほとんどいなくなってますね。まあだから、アイマラ語もちょっと習ったんですが、挨拶とかその位の程度でね、ケチュアの方はそこら中にしゃべる人がいるので、いつもしゃべっているうちに段々日常会話とかね、どんどんしゃべれるようになったんですよ。

藤田 最初サンタクルスにいらっしやって、そこでケチュア語に関心を持たれたわけですね。サンタクルスは例えばグアラニーの人たちも住んでいますよね。そういうチャコやアマゾンの言葉に行かないで、アンデスの言葉に関心を持たれたのは、偶然ですか？

栗原 それはね、ボリビア社会の問題の一つではないですかね。アイマラやケチュアの人たちはね、それなりの商売なり：社会の中の一員としてね、社会を動かしている人なんです。だか

ら市場でも店も持つてね、家も持つて、ホテルも持つて：中にはね、そういう仕事をしている。原動力ね、ポリビア社会の。でもグアラニーの人たちは、乞食とか、社会の本当の下層で：下層にも入らないような感じでね、生きている人が多いんですよ。サンタクルスにいても、道端で物乞いをしたりして：。アイマラやケチュアの人たちもね、最初は人夫とかお手伝いさんなんかをして働いても、お金を貯めたら自分で商売をして、社会の一員としてね、ポリビア社会を動かしている人たちなんですよ。その違いがあるんですよ。

藤田 そうすると、サンタクルスに普段暮らしでいて、自然な接点としてはケチュアの人たちの方が多かった、と。

栗原 そうですね、はい。

## (2) ケチュア語を覚える

藤田 先ほどの勉強の仕方をもうちよつと具体的に伺ってもいいですか。どういう感じで、こう人々と会話しながら：、あまり本で勉強されたわけではないのですよね？

栗原 ケチュア語は、はい、会話で。だから最初ね、知り合いのよく知っているおばちゃんが出て、あのペンシオンのね：料理屋の：市場のおばさんがね。その人はコチャバンバからの来た人なんで、ケチュア語をよくしゃべっているんで、その人に行く度に教えてもらったんですよ。それを聞きながら、聞いたものをね、ちよつとノートにメモして、忘れないように。そうやっ

て一日に一つずつ言葉をね、覚えていったんです。特に市場とかね、半分以上がケチュア語をしゃべっている人だったんで、だから市場に行くとき、おねえちゃんとかね、みんな喜んで、「チノが、チノがケチュア語をしゃべっている」とか喜んで皆でしゃべってたんです。

そのうち段々しゃべっているだけじゃなくて、もつと正確にしゃべりたいなと思って、コチャバンバに行って本を買って来た。本と辞書ね。本を読んでから、辞書を見ながらね、もうちよつと：（ここで店の人がお茶を渡してくれたので会話が中断）。

## (3) ケチュア語の日常会話から

### 読み書きへ

栗原 そうやってかれこれ五年ぐらいしゃべっていたわけですよ。大体五年ぐらいで日常会話がけっこうしゃべれるようになったんですよ。別にだからよかったですけども、それでちよつと仕事をするにも、測量の仕事をずつとしていたんですけども、何となく：年齢のせいで老眼が始まったんですよ。四四、五かな、老眼が始まってね：、測量の仕事って、トランシットとかね、レベルとか、あとパソコンね、これをいつも使うんですよ。だからものすごく目に負担が来るんですよ。だからそろそろ何か別の仕事をちよつと考えた方がいいかなってね、考え出したんですよ。まだその頃は測量の仕事はたくさんあって、それは順調だったんですよ、だからまあこの先何か別のこと

がないかなと考え出したんです。で、ふと：ふと、「ああ自分はケチュア語をしゃべるのがものすごく好きだな」と思って、「これで何か仕事にならないかな」って考え出したんですよ。それが、二〇〇〇年くらいですかね。「ケチュアやるんならついでにアイマラ語もね、しゃべれたらいいな」と思って、その時から本格的に勉強を始めたんですかね。

だからそのときから読み書き、自分で書いて読んで、やるのを始めたんですよ。ラパスとかコチャバンバとかポトシとかスクレとかに行つて本を買ったりね、あと「学校はないかな」と思っていたんですよ、まあコチャバンバとかポトシに行けばケチュアの学校はあるんだけど、サンタクルスに住んでいたんでね、「まあ学校はないや」と思って、こりゃしようがないや、本で勉強を始めた。読み書きを。

藤田 どんな本を買ってきたんですか？ケチュア語の入門の本とか？

栗原 うん入門書から。ケチュア語ではね、結構本は完備してますね。だからコチャバンバに行つたら、ケチュア語のね、それこそ入門者用（初心者用）、中級者用、上級者用、全部完備しているんですよ。

藤田 Luis Morato Peña の？

栗原 そうそう、アメリカで働いている、先生している人かな。あとそれ以外にもね、ケチュアの学校の先生に知り合いになったんです。クラスには行けないけども、コチャバンバにいった時は一回、二回ね、クラスに聴講生と言うん

かな、聴かせてもらってるんですよ。あと書いたものを直してもらったりね。その先生のところには、キリスト教の布教団体が作ったケチュアの本とかね、あとはケチュアでは詩とか：詩もあるし、小説もあるし、そういうのもあるんですよ。本が、だからそういうのも買ってね、読んで。ケチュアの詩とかは結構美しいなと思うんですよ。私それまでは詩なんて全然興味なかったんですけども、ケチュア語の詩を見てみるとね、これは美しいと思って。なんかものすごく：これをスペイン語に直しても全然面白くないな、でもケチュア語でしゃべると、詩がものすごくきれいな：響きがいいのかな。でそういうのも買ったりして、まあそういうことでケチュア語はサンタクルスにしながら、それぞれそこ勉強することができたんです。

藤田 その書いたものを持って行くというのは、どうなの？

栗原 しゃべるのはいいにしても、やっぱり正確にね、読み書きする…、いつも本格的に勉強したいなど思っていたら、いつもなるべく書くようにしたんです。一日に一ページでも、ケチュア語でもアイマラ語でもね、どんなことでも。最初は、朝起きたとかね、犬が吠えたとかね、そういうことででしたけれど、段々そのうちに、街で起きた出来事とかね、ちょっととした政治の話とか、宗教の話とか、社会的な話とかね、段々話す内容もちょっと考えさせるようなことを書き出して。ケチュア語だと日本の話を、やっぱりケチュア語で書いて持って行ったり、あと

ちょっとしたボリビアで気が付いたこと、道路が悪いとかそういうことをまた書いて持って行ったり、また書いてみたり、そういうことをね。なかなかコチャバンバに行く機会があまりないんで、なかなか持つて行く機会もないんだけど、でも書くよね、色々言葉以外にボリビアについて考えることがたくさんあるんで。

#### (4) アイマラ語の勉強を始める

栗原 アイマラ語は、サンタクルスで勉強するのはちょっとなかなか…。一応本はね、初心者入門用の本は読んでみたんですけど。

藤田 サンタクルスにもありました？

栗原 いや、ラパスから買って来て。でそのうちラパスに行つてね、本格的に勉強しようかなとはいつも思ってたんで、二〇〇四年ですか、その年にやっとラパスに来れるようになったんです。ちょっと仕事も暇になったというかね、自分で自主的に暇にして(笑い)、ラパスに来てアイマラ語を。で、どこか教えてくれるところないかなと思つたら、どこもないんですよ。大学に行つてもなかったし。そうするとRadio San Gabrielかな、あそこラジオを聞いているといつもアイマラ語でしゃべっているから、きつとあそこで何かクラスがあるだろうと思つて聞いてみたら、SAADか、あのSistema de Autoeducación a Distancia、あれがあったんで：通信教育かな、社会人教育の、アイマラ語とスペイン語の。でそれに一緒に勉強させてもらつて。だからアイマラはしゃべるよりもま

ず：、どっちか言つと書くほうが先だったかな。藤田 面白いですね。授業を取るのも「アイマラ語入門」とかじゃなくて、むしろ「ネイティブの」通信教育の生徒達と一緒に混ざつて…。

栗原 そうそう、みんなしゃべつてるところに入つて。それだけじゃなくて、Radio San Gabrielつてアイマラの人たちのための放送局でしょ。だから教育だけじゃなくて例えば、文化とか伝統の振興にもものすごく力を入れてますよね、アイマラの文化の振興。だから時々伝統医療や農業・牧畜や民芸の講習会とか、そういうのがあるんですよ。でそこにも参加させてもらつて、いつもラパスに来た時は。で参加させてもらつて、みんなアイマラ語でしゃべっている。そうこうしているうちに、だからSAADはね、二年くらいしかいなかったのかな。そのうち教材の内容がちよつと：高校卒業前の資格でしょう：だからね、内容はちよつとはつきり言つて退屈だったんですよ。まあアイマラ語を勉強するにはいいけれども、だからそのうちに退屈になつてね。それまでは二ヶ月に一回位かな、毎月一回クラスがあるんです、スクーリングがね、あるんですけども、まあサンタクルスで仕事をしてこつちに来るのも大変だからね、まあ半分ほど、一年で一回クラスがあつたら六回ぐらい参加しましてね。あとは自分で読めば分かるようになったし、内容も退屈なんだし、で二年間でやめたんですよ。

#### (5) アイマラ文化の世界へ

栗原 それでその代わりにね、文化の講習会と

かで：伝統医療の講習会とかがあつてね、色々とした知り合いができて、quini(コイリ(コジリ)、伝統医)のグループに参加させてもらうようになったんですよ、伝統医療の。私は伝統医療の医師の免許もあるんですよ。あれでね、伝統医療の人たちとね、昔の：現代医療じゃなくてね、薬草を使ったりね、マッサージュとか、あと生活習慣とかね、そういう改善と言うか：健康法。それを一緒に勉強して。だから二〇〇四年からずっと今まで参加させてもらって、一緒に勉強させてもらってるんですよ、伝統医療を。でそれはもうアイマラ語ですね、まあスペイン語が半分ぐらいか、ちよつと重要な所はアイマラ語じゃないと理解できないから。それで結構あいつた人たちと話していると、アイマラ語の勉強にもなるし。

藤田 アイマラの伝統医療の世界は日本人にはあまり馴染みがないけれども、興味を持つ人はたぶん多いと思うんですけど、さわりの所をどんな感じか簡単に説明してみただけですか？

栗原 そうですね、あの、アイマラの伝統医療：。近代的な医療は、どちらかというと、お腹が痛ければその部分を治す、頭が痛ければ：鎮痛剤ですか、それを与えて、アスピリンを与えて頭痛をなくすとか。対症療法、という傾向がありますよね。それに対して、伝統医療ですね、おそらく伝統医療はアイマラに限らず全てそうだと思いますけども、伝統医療が：病気を治すというよりも、全て総合的に体を調整する。

例えば、頭が痛いのもね、おそらく精神の不安とかね、生活の乱れとか、感情の不安とかね、そういうものから来る場合にもね。体と、精神と、生活と、全てをね、総合的に治すのが、そもそも伝統医療のスタイルだと思っんです。アイマラの世界観、アイマラの考え方みたいな：、よくススト(susto)という病気がありますよね、あれを西洋的に言うかどうか、夜泣きとか、色々な症状が考えられますけどね。でもここでは皆一般にススト、スストと言っていますよね。でそれはまあ魂がね、離れていくから、魂を呼び起こして、呼び戻して、拾うという、そういう感じですよ。ですから、体というよりももつと根本的に、生活一般、生活態度、あと魂、精神、そして皆調和よく生きる、生活する、そういうことを基本に、伝統医療は考えているんじゃないかと思えます。(つづく)

「落合さんの活動と扱っている商品などは、<http://www.puenteuno.com/>で見ることが出来ます。

「僕もかつて短く概説的な原稿を書いたことがあります。真鍋周二編著『ボリビアを知るための98章』(明石書店2006年)第14章「アイマラ語-歴史、社会学事情」。「まなぐ」の「ま」の字は、本当は「ヒ」のところが「ナ」です。

「語学の勉強の仕方については、僕自身も考えることの多いテーマの一つです。今年一月の初旬にコチャバンバで、文字者で政治思想の研究者でもある Luis H Antezana」と話していたときに、「大人になってからの語学の勉強は自分で考えてシステムティックにしないといけない。読む習慣をつけて、四六時中音声流して聞いていられるような状況を作るといい。そうやって自分で準備をしておけることは幾らでもある」という話になったこと、また昨年ラパスに住んでいる詩人の Virginia Arión と話していたときに、「文法というか仕組みを分かっただけでいくこと(IIここはどうなっているんだらうと何度も立ち返り考えること)と、その世界にとにかく入っていくこととするの両方が大事だ。そういう意味で、語学の勉強と誰かの詩を分かるうとするのはとても似ている」という話になったことを思い出します。

これは、多分アンデスの口承文学の研究の世界で、採録をする人が勝手に編集をしたり書き換えてしまうことに対する批判が近年強まっていること、そして話し言葉独特の話のつなぎ方に注目が集まっていることと関係していると思えますが、僕自身も昔から(言い淀みや飛躍も含めて)もつと話し言葉の感じが残っていてもいいのにとよく思うことがあったので、試しにこつてみます。

「今手元にはないのですが、Los amigos del libro という出版社から出ているもので、今でもラパス市内の本屋では見ます。見付からなかったら、社会問題を扱うようなラパス市内の古本の屋台を覗いてみましょう。」

私は yatiri (ヤティリ) と呼ばれるアイマラの伝統的な信仰や世界観に基づいた知識人で伝統医療も行う人たちがいることは(知識としては)知っていたのですが、quini はまた別の集団を形成しているところで、栗原さんの説明によれば、伝統的なアンデスの薬草などの治療法を用いて治療をするそうです。ちなみに yatiri は「知る」という意味の動詞 yatirna に習慣的行動を示す接尾辞 ni が付いたもの。この接尾辞が付くと名詞化されて、人々の職業を表したりすることが出来ます。ケチュア語の y と同じですね。quini の元の動詞 quillana は「治療する、治癒する」という意味です。

「ボリビア便り(その2)」で僕もこれを取り上げています。

## 連載第三六回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

## 第53景

ハリー・ビシエガス著

『ポムボ——チェの部下だったゲリラ』

について

の著書は、チェの言動など一部始終を近くで描いていて貴重だ。また、チェの死の直後からチリ入国までの凄まじい逃避行も劇的だ。これらの本をチェの『ボリア日記』と併せて読むと、ボリアでのゲリラ戦の様相が複眼的かつ立体的に見える。

キューバ革命軍退役少将ハリー・ビシエガス（一九四〇年生まれ）は、故エルネスト・チェ・ゲバラの側近中の側近だった。革命戦争中にマエストラ山脈でチェの部下になり、信頼されて護衛になる。チェの一九六五年のコンゴ遠征と、六六・六七年のボリア遠征に同行した。チェは六七年一〇月ボリアで死ぬが、ポムボは仲間二人と六八年キューバに生還して少将まで昇進した。一九九六年に、この著書をハバナのエイトロー・ポリティカ社から出している。調べごとがあつて久々に読み直したが、あらためて幾つかの興味深い点があるのを確認した。「ポムボ」という暗号名はコンゴ遠征時につけられたもので、スワヒリ語で「葉」を意味する。ポムボはアフリカ系キューバー人

昨年（二〇〇九年）、邦訳が出た『革命の侍』（松枝愛訳、長崎出版）は、チェの部下としてボリアで戦死した日系二世フレディ前村の人生と、フレディが属していたチェのゲリラ縦隊（コルムナ）後衛隊から見たゲリラ戦の推移を描いた点が面白い。このポムボ

ポムボは著書の前書きで、「米政府は、キューバが

南米の内陸国ボリアでゲリラ戦を起すことはあるまいと踏んでいた。だが、まさにそこにチェの驚くべき戦略があつた。帝国主義の兵力を他方面に向けさせるためだった。チェはキューバー人がボリアで革命を起すのではなく、ボリア人が革命を起すのを支援しに行くのだと説明していた。ボリア人には編成と訓練などが済めば、ゲリラ部隊の指揮はボリア人に渡すと伝えていたと書いている。ボリア人はコノ・スル（南の円錐形）＝南米南部諸国）全体を解放するゲリラ部隊の中心地であり、ボリア共産党（PCCB）は戦闘的で、「権力を奪取する唯一の方法は武闘だ」と考えていた——とも指摘している。フレディのような青年黨員たちはキューバで軍事訓練を受けていた。

PCCBは、亜国アルゼンチン人ホルヘリカルド・マセッティが亜国北部国境地帯でゲリラ戦を一九六

三年に展開した際、支援している。ポムボは、マセッティのゲリラ部隊に参加したかったが、チェから「肌の色ゆえに亜国北部では怪しまれる」と諭され参加を断念した、と後年述懐している。

問題は、PCCB党内に路線対立があつて、書記長マリオ・モンヘが対米平和共存路線を採るソ連共産党に忠実だったことだ。結局、これが災いしてチェの部隊は十分な協力が得られず、準備段階から作戦に支障を来すことになる。

ポムボは、著書の基にある自身のボリア日記についても触れている。著書は第一部（一九六六年七月一日——一九六七年五月二八日）と第二部（一九六七年五月二九日——一九六八年三月六日）に分かれている。著書出版に際して第一部には修正や添削がなされたことを示唆しており、第一部には帰還後に行なった講演の内容なども書き加えた」と明記している。このため（まともな記事）のようになっていく部分が少ない、書いたまま死んでいったチェのボリア日記のような（手を加えていない面白さ）には欠けている。だが、記述内容、特にチェの死後のボリア脱出とチリでの出来事は極めて新鮮だ。因みに、第一部はチェの日記と同様、ボリア軍に押収された後、当時のボリア内相アントニオ・アルゲダスによって、複製されたものがキューバ側に密かに届けられた経緯がある。以下に、著書の内容の一部を紹介する。

## 第一部

▽六六年八月二九日 ウムベルト・レア（チェの

ゲリラ組織の都市網の長の分析——①ボリビアでは

長期の武闘でなく人民蜂起による短期決戦で権力を握る②人民大衆のなから蜂起の指導者を生み出す

③ペルーと亜国での失敗およびベネズエラの状況を注意深く分析する④作戦地域を選択するに際しては農民大衆を動員する手段を無視してはならない。土地

が余っているため農民は土地獲得闘争に興味はない

⑤ハリエントス(当時の軍人大統領)はコカイン密輸を支配するためコカ畑を管理しているが、この点に国連は目をつけている——。

▽九月二日：作戦地域に選んだニヤンカウアス

——帯は、アンデス東部山脈と、ヒリレンダス山系と、インカグアシ山系間の渓谷地帯にある。この東部山脈は亜国のサルタまで続いている。

▽九月二日：キューバ革命は二人の戦士で始まったが、このことは忘れるべきだ。ボリビアでは大

人数の闘争になり、しかも南米大陸でのゲリラ活動が及ぼす影響は、小さな島国キューバの場合と比べ桁違いに大きい。

▽九月二日：モンヘ曰(いわ)く、「ソ連は支援を約束しているが、ソ連にもゲリラ部隊の指揮は自分の責任だと伝えてある」と。モンヘらPCB幹部は

しゃべりすぎており、ウルグアイ共産党書記長ロドゥニー・アリスメンディは、「ラ米の全共産党の書記長

たちに情報を与えるべきだ」と主張している。

▽二月二日：チエは、「ボリビアでの闘争は一〇年ばかりか。権力を握っても周辺諸国で同様のこ

とが起これなければ、内陸国であるためたちまち封じ

込められ潰されてしまつ」と言っている。

▽六七年一月一日：モンヘはPCBが武闘に参加するための三条件を提示した。それは①親中国路線は受け入れない②政治・軍事両面の指揮をPCBが執る

③武闘路線採用に関してラ米共産党と是非を議論する——。

## 第二部

▽六月某日：「ゲリラ闘争を進展させるための唯一の方法は、都市網と連携することだ」。鉱山労働者に参加を呼び掛ける。広範な労農同盟を構築し、敗北を勝利に変えよう。▽一月九日：我々(残存部隊

戦士)はレイゲラ村の小さな学校の前に来ていた。朝の七時にヘリコプターが飛び立った。

▽一月二日：この日の午後、チエの死のニュースを聞いた。チエは私にとって父親のような存在だった。

▽六八年二月二日：ポムボ、ベニグノ(タリエル・アラルコン)、ウルバーノ(レオナルド・タマヨ)のキューバ人三人がチリ入国。

▽二月某日：ラジオは、チリ共産党(PCCH)が我々に政治亡命を認めるよう人民大衆と政府に要請する声明を発表したと伝えた。チリ上院議長サルバ

ドル・アジェンデ(後の大統領)も、我々の搜索と亡命に腐心しているとの声明を発表した。後日、サン

ティアゴ市内のチリ捜査警察本部でアジェンデと会った。

▽二月二日：バスクワ(イースター)島に到着約一週間滞。到着したアジェンデとともにタヒチ島

に飛ぶ。アジェンデと別れ、駐仏キューバ大使とともにヌメア、コロンボ、アディスアベバ、パリ、モスクワを経由する。

▽三月六日：ハバナ帰着。空港に最髙司令官フィデル・カストロが待っていた。ボリビアでの一部始終を五時間にわたってフィデルに話した。フィデルは

「諸君は攻撃的で戦ったから生還できた。恐怖を示していたとすれば斃(たお)れていただろう。まさに諸君の力、革命精神、抵抗、戦闘能力がものを言った」と讚えた。

★後日談

ベニグノことタリエル・アラルコンは革命過程に幻滅して一九九六年にフランスに亡命し、その後パリに住んでいる。二〇〇九年一月二五日付のイタリア紙コ

リエレラセーラ掲載のインタビュー記事で、「フィデルはキューバ革命を救つたため、チエを犠牲にした」、「ウルバーノ(レオナルド・タマヨ)は逮捕され、そ

の一方でポムボが将軍に昇進するとは。これには幻滅した」などと語っている。

★★★新刊書紹介——伊高浩昭著『ラ米取材帖』(ラティーナ社、4月1日発売予定)。著者の1967年以来43年に及ぶラ米全域取材記の第一部で、24章で構成される。問い合わせは、ラティーナ誌編集長・船津亮平(電話03-5768-55)

「フェルナンド・ロリさんを偲ぶ」

三月十一日の夜一〇時頃、一本の電話がかかってきた。日本で活躍している素晴らしいクリオーヤ歌手のユリさんからだった。その電話は、クリオーヤ音楽のトップを走り続けた音楽家であり、私も尊敬してやまないフェルナンド・ロリさんが、十一日に神奈川県川島の病院で亡くなったことを告げるものだった。享年七十一歳、糖尿病を患っていた体に心臓病の悪化が原因だという。

数年前に体調を崩された彼は思わしくない状態が続いていたがその後回復され、最近はずいぶん元気で楽しそうに歌ったり踊ったりしていたのを見ていただけにショックだった。バルスへのあふれんばかりの愛情が一目見てもわかるぐらいの人だった。バルスと共に生きてと言っても決して過言ではないと思う。お葬式のミサで、亡くなる日の朝までバルスを歌っていたと家族の方が言っておられたのが印象的だった。あの歌声が、そして彼の吟じるコプラが聞けないのが本当に悲しい。

フェルナンド・ロリさんは、すでに日本で暮らし始めていた日系の奥さんと子ども

たちのところに移住する九〇年代まで、精力的にペルー国内で音楽活動を行い、常に第一線で活躍してきた超大物の音楽スターだ。八歳の時に歌謡コンテストで優勝して以来、歌手として、そしてギタリストとして、ペルーのクリオーヤ音楽の黄金時代を牽引してきた。ちなみに彼は「クリオーヤ音楽のファラオ」の異名を持っている。二〇〇五年に愛知県で他界した日系ペルー人の作曲家で、連載第十四回でご紹介したルイス・アベラルド・タカハシ・ヌニエス氏とも親交深く、ヌニエス氏の故郷である北部のレパトリも数多く持っている音楽家だ。またロス・チョロスやエンバドールス・クリオーヨス、チャマスなどのペルー音楽史に残る名グループとの共演も多く、特にエンバドールス・クリオーヨスのロムロ・バリージャスと組んだデュオ・ロス・コンパドレスが録音したエル・ピラータは大ヒットとなった。

さらには、六〇年代には、ギターの連続演奏時間七六時間四五分という、脅威のギネス記録を打ち立てたりもしている。奥さんが食事などの世話をする中、この三日間不眠不休の記録を達成したのだとか。

さらに、ドン・フェルナンドは、若き日のアルトゥーロ・サンボ・カベロを見出した人でもある。彼のバンドでカホンを叩



くようになったサンボを、フェルナンドはオスカル・アビレスに紹介した。彼がいなければサンボ・カベロはドラマーで終わっていたかもしれない。ドラムセットからカホンへと楽器を乗り換えた後、フェルナンド・ロリとペーニャで演奏するようになり、徐々にサンボはクリオーヤ音楽の世界に入る。そしてアウグスト・ポロ・カンポスの「日曜日はミサの後十二時に」を歌い、その後一気に有名になった。このように親交が深かったサンボ・カベロが昨年秋に亡くなったことで気落ちし、体調を崩

して入退院を繰り返すことになってしまったという。

昨年は在日のペルー人音楽家や大使館などが、フェルナンド・ロリの功績を讃えたイベントを行ったところであった。私が最後に見た昨年の九月のステージでも、本当に楽しそうに歌ったり、絶妙な掛け声で囃したりしておられ、楽しそうなフェルナンドさんと、彼を愛し尊敬してやまない周囲の音楽家たちの心遣いが心を打ったのが記憶に新しい。若き日の彼は、フアラオの異称に似あわず甘い甘い歌声が売りだった。しかし晩年は、古き良きクリオーヨの雰囲気をもとった、伸びやかで威勢の良い歌声へと変化していった。直接彼の歌を聞くことができたからかもしれないが、個人的には、晩年の歌いの方が好きだった。



んとの出会いもこのバンドで、神奈川県の大和市で開催されたペルーのお祭りセニョール・デ・ロス・ミラグロスに出演したのがきっかけだった。特にうちのバンドのカホン奏者のねえなは、直接フェルナンド・ロリさんとステージで共演する幸運に恵まれ、彼女は浴びるようにフェルナンドさんのギターを間近で聴き、共に練習しステージで演奏した。いつも以上に盛り上がったて誰よりも楽しそうにカホンを叩いていたねえなの笑顔は、そのステージを見ていた多くの知り合いからも「本当に気持ちよさそうに叩いていたね」と言われるほどであった。フェルナンドさんのステージは、それほど心浮き立ちハイな気分させる、まさにハラナなステージだった。

こうしたことがご縁で、特にフェルナンド・ロリの娘さんであるユリさんにはその後いろいろな気にかけていただくこととなった。あまりに早くに逝ってしまった父の死を、ただただ悲しんでいたお葬式での彼女の姿が忘れられない。お葬式は翌十二日に本厚木の潰れたライブハウスを借りきって行われた。おそらく関東在住者を中心に一〇〇名をかくる超えるペルー人弔問客が彼の死を痛んだ。

一〇人いる彼の子供の一人は結婚してカナダに住んでいたため、ネットを通じてカ

メラとチャットでお葬式に参加していたのが印象的な景色でもあった。その日は朝まで演奏をしながら故人を偲ぶというお話だったが、私は翌日イベントの予定が入っていたため、演奏が始まる前においとますることになった。しかし、生前バルスをこよなく愛した彼を悼んで、きつと皆夜遅くまで尽きることなくバルスを演奏し続けたことだろうと思う。

多くの人に愛され、多くの人にハラナな、楽しい音楽を届けたフェルナンド・ロリさん。彼のあの茶目つ気のある笑顔をもつ見ることが出来ないのが悲しい。そして彼の歌とギターをもっと聴きたかったと心から思う。二〇世紀半ばに活躍した偉大な音楽家たちが残していったこの素晴らしい文化を、少しでも多くの人に知って、聴いて、楽しんだり涙したりして、また次の世代へとその心を伝えていければ、と思う。

(水口良樹)



# サルブテ

## Salbutes

### 材料 (4人分)

- ・トウモロコシの粉 250 グラム
- ・小麦粉 50 グラム
- ・紫タマネギ 1 / 2
- ・トマト中 2 個
- ・乾燥オレガノの葉 大さじ 1 / 2
- ・コショウ
- ・レタス
- ・鶏肉 250 グラム
- ・熟したアボガド 1 個
- ・ローリエ 1 葉
- ・塩
- ・サラダ油

### 作り方

- 1) ローリエとオレガノ、塩コショウと一緒に、やわらかくなるまで鶏肉ををゆで、指で細かくほぐす。
- 2) 深めのボウルで、トウモロコシ粉と小麦粉をよく混ぜて塩をふり、少しずつ水を加えて、湿りすぎもせず乾燥しすぎでもない状態の練り粉の塊にする。指にくっつかないよう気をつける。
- 3) タマネギを細切りにして、3分ほどゆで、塩をふる。湯を捨ててさます。
- 4) トマトを薄い輪切りにする。
- 5) レタスを洗って細切りにする。
- 6) ポリ袋を切って広げたもの 2 枚を使って、手でトルティーヤをつくる。セ氏 180 度前後の油でうまくふくらむように揚げる。
- 7) アボガドを縦に 2 つに割り、種を取り除く。その後、食べやすい大きさに切る。
- 8) トルティーヤを焼いたあと、レタスを敷いて、鶏肉、タマネギ少々、アボガドの順にのせる。辛いものが好きな人には、チレを加える。  
その上にトマトの輪切りをのせる。さらにデルモンテなどのメキシコ風トマトソースをかけてもよい。

ミゲル・アクーニャ メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986 年に来日。「FM COCOLO」で DJ をつとめた。大阪・天満で「メリダスペイン語教室」(<http://www.merida-mex.com>) 主宰。メキシコ料理店を開くため、準備中。

サルブテスはユカタン地方の軽食で、ユカタン州やその周辺でよく食卓にのぼる。古代マヤ人もこの料理をつくっており、Salbutes はマヤ語で「詰め物がない」ことを意味する。

「詰め物がない」というのは、トルティーヤのなかにフリホーレス(煮豆)を挟んだものをベースにした軽食「バナチョ Panuchos」があるからだ。サルブテスは下に敷くトルティーヤの中にはない。

油で揚げてふくらんだトルティーヤの上に、生のレタスを敷き、細かくほぐした七面鳥か鶏の肉をのせ、茹でたり酢やコショウとあえたりした紫タマネギ、トマト、ユカタンにしかない白キュウリをのせる。

サルブテスには、牛肉や豚肉の挽肉を使ってもいいし、七面鳥や鶏でもよい。肉食主義者には、生レタスとキュウリ、トマト、紫タマネギを載せるだけでもよい。

ユカタンには、こうした独特の軽食をそろえる専門店があるが、ホテルのレストランでも味わうことができる。

私が子供のころは、ときどき兄弟でサルブテスをつくり、夜、テレビを見ながら食べたものだ。サルブテスの味は、メキシコに帰るときの懐かしさと心地よさを思わせてくれる。

今回のサルブテスのレシピにはキュウリは使っていません。

## フォトコンテスト講評 古谷桂信

レコムで初めての試みのフォトコンテストでしたが、最終的には一一作品が集まり、コンテストとしてなんとか成立しました。当初は、清水透先生の作品しか届かなくて、気をもみましたが。

まず、単作品（一枚もの）と、組み写真（複数枚で構成）どちらでの応募もかまわないということなど、こちらからの情報提示が上手くいかなかったようで、共通認識をもっていただけなかったようです。選考方式は、投票制で、一位三票、二位二票、三位一票としました。三位は二作品選んでもかまわない、また、選外として、選ばない順位があってもいいとしました。

結果的には、選に入ったものは、組み写真が多かったですが、清水先生の作品は、単写真ですが、



選考作業の風景



宇田有三さんの組写真「コマラパ」より



柴田大輔さんの組写真「ラファミリア」より



二位に入りました。表紙写真。作品の意図がしっかりしていれば、どちらが、有利、不利はとくにないと思われず。

選考過程ですが、選に入った四作品に票が集まりました。遅れてこられた方（藤井さん）が最終投票するまでに、宇田さん「コマラパ」九票、柴田さん「ラファミリア」九票で並び、清水先生「弟の遺影をもつ……」が七票、栗田さん「アルティプラーノ」六票でした。

最後の投票で、柴田さん一一票、清水先生一〇票、宇田さん九票、栗田さん六票となりました。

新川さんがまとめて送ってくださったマルーカさんの活動の写真の中では、「パイアの栽培で成功した家族」Ⅱ写真左Ⅱの写真のパイアが巨大でなんともいえない面白みがありました。票は集まりませんでした。

## ボリビア 内閣の半数は女性

ボリビアの内閣は新憲法の理念の1つである男女の均等を初めて実施した。今年1月23日、エボ・モラレス大統領は内閣の半数にあたる10人の女性大臣を任命したと発表。司法、汚職に対する闘い、生産、保健と農村開発に関する省などの大臣を女性が占めた。大統領は「女性が社会的な闘いに参加するだけでなく、政治的な闘い、官僚職に就くという長年の夢が今日実現した。」と、アンデス文化である男女がお互いに補完しあうことの重要性を強調した。モラレス大統領は次期2期目（5年）の就任に際し内閣の半数以上を刷新したことになる。総選挙の時に、男女同比率で候補者リストを作らせたことを反映して、議会でも女性の存在は大きくなった。ボリビアで第三の権力である上院議員の議長も女性である。また大統領は、対野党政策を担当していた二人の閣僚を解任したが、この決定は野党から歓迎されている。（BBC Mundo 2010/01/23 より）

## カナダ最高裁、鉱山開発の「分割」を禁止し、市民参加と包括的な環境アセスメントを義務づける—中南米での鉱山開発にも適用

今年1月21日、カナダの最高裁は大規模な鉱山開発を分割せず包括的な環境アセスメントを行うことと、アセスメントに住民参加を義務づける判決を下した。同判決は、露天掘りによる大規模な銅・金鉱山開発を行うレッド・クリス社がプロジェクトを分割することで、開発が環境に及ぼす影響を明らかにすることを回避してきた事実を指摘した。同社のプロジェクトは1日に3万トンの鉱石を精製し、ブリティッシュ・コロンビア州の遠隔地に有害廃棄物を投棄している。この地域は多くの哺乳類動物が生息し鮭が産卵する重要な場所で、環境や住民に計り知れない危険を与えるものであり、プロジェクトの認可の前の包括的な環境アセスメントは必須であることから、米州環境保護協会 AIDA などのいくつもの環境保護団体がこのプロジェクトの認可は国際環境法を無視していると訴えていたもの。

最高裁は連邦政府に対して、分割化したプロジェクトの認可が、環境アセスメントに地元グループや共同体が参加することを阻んでおり、国際的な環境法を侵害していると指摘した。環境運動側は「これまで環境や社会へ大きな影響を引き起こしてきたプロジェクトは、分割という形にしていたため部分的にしかアセスメントが行われてこなかった。今回の判決は極めて重要なものである。またこの判決は国際的な環境法にも合致するものであり、修復不可能な環境への被害を予防し、住民参加の権利を尊重するものである。」と判決を評価している。この判決は、現在中南米で行われているカナダ企業の鉱山開発にも適用されることになる。（AIDA-americas.org 2010-01-27 より）

## エルサルバドル—フネス大統領内戦中の人権犯罪に謝罪

エルサルバドルのマウリシオ・フネス大統領が内戦の犠牲者に対して国家の責任を認め、これを公式に謝罪した。エルサルバドルの内戦は12年間（1980年-1992年）におよび、7万5千人以上の死者、8千人の行方不明者、50万人以上の避難民を出した。1992年、国民共和同盟（ARENA）とファブランド・マルチ民族解放戦線（FMLN）との間で和平合意が調印され内戦が終結。その後右派政権が続いたが、2008年にはFMLNが初めて政権をとった。この謝罪は、内戦終結後エルサルバドル大統領として初めて。フネス大統領は、内戦中の政府と軍による甚大な人権侵害と憲法違反に言及し犠牲者の尊厳を回復し、犠牲者や国全体が負った内戦の傷跡を回復しなければならないと述べた。内戦の遺族の一人は、「政府が勇気を持って間違いを認め、真実を知るための道を開いたことに感謝する。」と述べた。しかし、FMLNが内戦中に行った人権犯罪に対しては謝罪していないことから、これを批判する声も多いだろうという指摘もある。（BBCMUNDO 2010/1/17 より）

# **\*\* Información \*\***

## お知らせ

### ◆グアテマラ内戦中の性暴力を裁く「先住民族女性の民衆法廷」東京報告会◆

日時：2010年4月17日（土）18時30分～

会場：アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館（wam）」

東京都新宿区西早稲田 2-3-18 AVACO ビル 2F Tel：03-3202-4633

報告：石川智子（グアテマラ在住）／岡野内／中川幸（いずれも傍聴参加者）

参加費：800円

連絡先：

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館（wam）」

Tel：03-3202-4633 Fax：03-3202-4634 E-mail：wam@wam-peace.org

先住民族の10年市民連絡会

Tel/Fax：03-5932-9515 E-mail：indy10-Lj@infoseek.jp

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（レコム）

E-mail：recom@jca.apc.org

\*別紙にて詳細チラシを同封しています。ご覧ください。

### ◆『中南米の音楽：歌・踊り・祝宴を生きる人々』発売◆

石橋純(編) 東京堂出版 2010年3月30日発売 1800円+税

「音楽三昧ペルーな日々♪」を連載中の水口良樹さんが第7章を執筆しています。

お知らせコーナーについてですが、そんりさは隔月発行となっており、〆切は奇数月の10日となっています。情報掲載ご希望の方はお早めをお願いします。リアルタイムでブログにて情報発信も行っていますので、こちらもご利用ください。

【ブログはレコムのHP <<http://www.jca.apc.org/recom/>> よりどうぞ】

## レコム梅村図書館について

貸出を開始しております。目録がお手元がない方は事務局までお知らせください。ホームページにも目録を掲載しています。

## 会費について

会費期限は「そんりさ」をお届けする際の封筒宛名ラベルに印字しております。期限が来ましたら、事務局よりお知らせを同封しますので、お早めの更新をお願いいたします。

## 事務局短信

事務局の移転に伴い、電話は常時留守番電話となりました。伝言を残しておいて頂ければ、こちらより折り返しご連絡いたしますので、よろしく願いいたします。

**\*\* \*\* \*\* \*\* \*\***

今年も総会の時期が近づいてきました。昨年は京都と東京で同時開催し、スカイプを通じて会議を行いました。例年より多くの会員の参加があり、レコムの今後の活動について話し合うことができたのはとてもよかったと思います。それを受けて、今年はグアテマラ支援活動で新しいプロジェクトの支援を始めたり、昨年からの内戦下性暴力についてのプロジェクトや民衆法廷、そのフォローアップなど活動をさらに広げることができました。今年の総会でも、さらにレコムの活動についての議論を広げられればと思います。総会は会員同士が交流し、会員の声を活動に反映する機会です。今年も京都と東京で同時に開催しますので、皆さんぜひ参加ください。(新川)

次回の『そんりさ』発送作業は 6 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください。

大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間です。

レコム・メーリングリストのご案内：会員・購読者は無料で参加できます。

登録したい方は E-mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどんどんリニューアル!

<http://www.jca.apc.org/recom/>

- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| Vol.123 「やより賞」記念ツアー報告 | Vol.119 ナルコメヒコ メキシコの麻薬 |
| Vol.122 グアテマラ視察報告     | Vol.118 エクアドル資源開発と先住民族 |
| Vol.121 ペルー先住民族の動向    | Vol.117 エクアドルの先住民族活動家  |
| Vol.120 コロンビア 慢性化した紛争 | Vol.116 メキシコ先住民農村は今    |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)…会の運営、総会での投票、『そんりさ』資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

**レコム連絡先**

〒 616-0004  
 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方  
 TEL&FAX 075-862-2556 (留守電)  
 お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは  
 は留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>  
 94 万 5903 円  
 <グアテマラ基金>  
 21 万 6413 円  
 (2010 年 3 月 19 日現在)